
譜面の刃

きまぐれのエルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

譜面の刃

【Nコード】

N0210W

【作者名】

きまぐれのエルフ

【あらすじ】

幼くして親を失った少年が親の形見の剣を持ち魔法世界や旧世界を義賊として回る物語、少年は祝福されぬ人たちのために努力する

第一話

はじめり（前書き）

はじめて書いたんでよろしくお願いします
更新不定です

第一話

はじまり

僕の名前はカイト、七歳、魔法世界に住む人間種です。

目と髪が緑色なのが一番の特徴、

髪は深緑言った感じで背中までの長髪、よく女の子って昔間違われたんだ

僕の住んでいる村は山々に囲まれていて

魔法世界の中でも鉱石がたくさん取れる、

けど連合の人も帝国の人も全然訪れない。

人里から離れているのも理由の1つだけど、

一番の理由は発掘のための施設を造る事ができないから

鉱山の近くで施設を建てる事ができる土地は僕の村しか無い、
村の中に施設を建てるとしても小さなのでスペースが無かった。

3

だから鉱山の鉱石はほとんど僕の村のものになってる

お陰で村は取れた鉱石で武器や防具を作る鍛冶屋職人は儲けていた。

僕の家も鍛冶屋だったけど儲けてはいなかった

父さんの仕事場からいつもハンマーで金属を叩く音が聞こえてくる

時々覗いて見るけど父さんはハンマーを握ってないときは
ずっと悩んだ顔をしてる

父さんが心配になるけど聞くことができなくて、母さんに聞いてみた
だけど母さんはその事について何も教えてはくれなかった。

僕は毎日のように山の中に竹刀を持って遊びに行った。
今日、初めて会ったのは青い小鳥さんだった。

その後には魔獣に会った。

この村の近くの山に住む魔獣は大きくても人間の大人と同じくらい
の高さで大人しい性格だ

犬のような魔獣の背中に乗って山の中を進んでいく

つい興奮して右手に持った竹刀をブンブンと振り回す。

毎日同じことをしているけど山を進んでいくのは飽きない。

だけどたまに山の外に出てみたいと考える

僕は大きくなったらいつか村を出て旅しようと思ってるんだ

自分の足で世界を回って、自分の目で世界を見てみたい

外は危険で凶暴な魔獣がいることも

治安が悪いのも知ってる。

だから強くならなくちゃいけないんだ。

でも、僕は魔法詠唱ができないから魔法を唱えることができないんだ

魔法使いには適してなさそうだから

剣士になろうと思ってるんだ。

魔法を使ってドカーン！！って派手に暴れることができないけど

ほら剣士って剣を使って戦ってカッコいいでしょ

僕も剣士になって凶暴な魔獣なんて

シユパンのジャキンでやつつけちゃうんだもんね！！

・・・でもその時には山の皆とお別れしちゃうのか

それからある日の事、

僕と母さんがお昼のご飯を食べている時だった

♪♪♪

父さんの仕事場の方から綺麗な音がして

その後にガラガラと何かが崩れる音がした

その音が気になって僕と母さんは父さんの仕事場に走った。

そこで見たのは父さんの背中と何故か粉々になっていたレンガだった。

「やった・・・ついに完成したぞお！！！」

父さんは歓喜の声をあげて喜んでいる、
最近見なかった父さんの笑顔が見えた。

「やったのね・・・貴方」

「ああ、やったよ・・・」

父さんと母さんはギュツと抱き合って動かなかった
僕には何があつたかまるで分からなかった。

ふと父さんの右手に握られているものが目に入る
それは一本の剣だった。

父さんは鍛冶屋だから剣を持ったりしてても不思議じゃないけど、
その剣は不思議な形をしていた。

1m位の純白の刀身で刀身の先端から根元へ長い五線譜が描かれて
いて、

縦笛みたいに小さな穴が真っ直ぐ等間隔に空いてある・・・

中に小さな空洞でもあるのかな？

「父さん、それ何？」

父さんと母さんは離れて僕に顔を向ける
二人とも笑顔のままだった

「カイト、もう少し待てば分かるからな」
父さんは僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でる、
久しぶりに頭撫でてもらっちゃった

エヘヘ・・・

何かよく分からないけど、

父さんは一段落付いたみたいでお昼ご飯と一緒に食べた

食べ終わった後は、

母さんは食器洗いで父さんはまた仕事場に僕は山の中に遊びに出掛けた。

それから二日後、

相変わらず父さんは仕事場で何かやっていて急がしそうだった
母さんは家事で忙しいし・・・

僕は山の中に遊びに来ている。

あの剣のことが気になって竹刀を持ってくるのを忘れちゃった
今日は何もやる気が起きなくてお昼寝」することにした。
魔獣の体毛が温かくて気持ちいい・・・

スー・スー・・・んあ

ふああああよく寝た

周りにいた魔獣は皆どこかに行っちゃったみたい
どれくらい寝てたのかな・・・村に帰ろう

村の方角を見てみると赤く光っているのが見えた
夕方なのかと思ったけどそれは違った

「村が・・・燃えている」

メラメラと炎が村全体を燃やす

建物の全てには炎が回っていて危険だったけど
僕は村の中に入って行った。

どうしてか父さんと母さんがそこにいるような気がしたから

「父さーん！！母さーん！！」

炎の中で必死に叫んだけど返事はない

暑くて苦しくて息がしづらい

煙が酷くて目が痛い、

視界が霞んで上手く立てない、

ふらふらしながらも僕は父さんと母さんを捜し続けた

わっ、ドシャー！！

足が何かに引っ掛かって僕はバランスを崩し倒れた

倒れた時に口の中に土が入る、
直ぐにぺっと口から出した。

土は炎に熱されていて舌が火傷するかと思うくらい熱かった

そのお陰で意識が少しはつきりとする

後ろを向いて足に引っ掛かったものを見る

それは見慣れた腕だった

「父さん!!」

倒れて動かない父さん呼びながら体を揺する

父さんの腰から下はたくさん鉄骨で押し潰されていた

退けようと鉄骨を持とうとするとジュツと掌が焼ける音がして素早く手を戻す

とても熱くて触れてられない

けどこのままだと父さんは・・・

そう思った僕は再び鉄骨を持って退けようとする

鉄骨は重くてビクともせず、手が焼けるだけだった。

「カイトか・・・」

「っ！父さん、大丈夫!!!」

鉄骨から手を離して父さんの隣に座り込んだ

父さんもう生きているのがやっとの状態だった。

「最期にカイトに会えてよかった・・・」

「何言ってるの・・・死んじゃやだよ」

父さんは倒れた鉄骨の下から何か引きずり出した
長さが僕の身長くらいで高さと幅は30cmくらいの箱だった

「こいつを持って逃げるんだ・・・きつとカイトの役に立つ」

僕は箱を抱きかかえた

子供には少し重すぎる重量だ

「グッ・・・そろそろ母さんの後を追わないといけないみたいだ」

「う・・・うぐ・・・ひく」

「泣くなカイト、大きくなったお前を見れないのは心残りだが・・・
父さんと母さんの分まで生きてくれ」

「・・・うん」

「村に火を放ったのは山賊だ、見つからないうちに逃げろ」

僕は立ち上がり涙を拭いた

すると炎の中から誰かの声がした

山賊だ、僕は足が震えて動かなくなった

こ・・・こわ

「カイト走れ!!」

父さんの叫び声に体がビクツと反応して走り出した

抱きかかえた箱を落とさないように

僕は山の中に逃げた。

後ろから誰かが追ってきている音がする
誰・・・と言っても山賊以外ないだろう

走って走ってただひたすらに山の中を逃げ回った・・・けど

ザアアアアア

前はがげで行き止まりになってしまった
側には滝があつて崖の下は大きな川になっている

「追いついた、観念しな・・・ってガキじゃねえか
まあ村のやつは皆死んでもらわないとな」

一人の山賊が現れた
手には斧が握られていて今にも襲いかかってきそうだ

「なんで村を燃やしたの」

「なんで、ねえ・・・俺たち山賊は依頼を受けたからかな」

「誰に・・・」

「それは言えねえ、お前が大きくなれば分かったかもしれないがな
！！」

その言葉を最後に山賊は素早く距離を詰めてくる
僕は箱を盾代わりに構える

山賊は斧を振り上げて僕の小さな身体ごと吹き飛ばし
僕は滝壺に落ちていった。

「うわあああああ！！！！」

ザバーーーン！！！！！！！！

う・・・ここは？

グツと身体を起こして周囲を確認する
どこかのログハウスのようだ

どうやら僕はベッドに寝かされていたみたいだ、
服も着替えさせられている

そうだ、山賊に襲われて、それから・・・

ガチャ、部屋のドアが開いて一人の年老いた男の人が入ってきた

「おお、起きたか少年」

「・・・おじさん誰？」

「っこのログハウスにじいさんだの、
お前さん二日も寝むつとたんだの」

え、二日・・・村はどうなったんだ

「あつあの、この近くで家事になった村のこと知りませんか？」

「家事・・・」

川の上流にある村のことかの？」

「きつとそれです!!」

おじさんは難しい顔をして僕を見た

「お前さんその村の者が
辛いかもしれんが心して聞くんのだの」

その後語られたのは
村が全て燃えて跡形もなくなり村の人も死んだと言っ
信じたくないことばかりだった

そこに偶然近くを巡回していたMMの魔法使いの集団が
駆けつけて事態は治まった。

犯人の山賊はどこかへ逃げた

そうニュースで流れたらしい

僕はショックを受けた

父さんも母さんも村の人も、もう……
何もかも嫌になってログハウスの外に飛び出た

目の前には大きな川が流れていた
この川を流れてきたのかな

周りは森で他に家が建っていない
とても人が来るような場所ではなかった。
まるで世界に僕一人取り残されたみたいだ

身体に力が入らない……

「隣いか、少年」

ログハウスのおじさんが追いかけてきたみたいだ
おじさんは返事を聞かず隣に座る

おじさんは隣にただで僕に何も話し掛けてこなかった
結構な時間が過ぎていく
太陽が高いからお昼になったとこかな

少し落ち着いて

僕はおじさんに話しかけてみた

「おじさんはここで一人で暮らしてるの？」

おじさんは僕が話しかけるのを待っていたかのようにニカツと笑った
「そうだの、かれこれ20年隠居しとる」

「20年・・・寂しくないの？」

「寂しくはないのう、森には妖精や魔獣もあるしの、
ただ家族のことが気になるのう」

「おじさんの家族？」

「旧世界で剣術の師範をひとつたのだがの
息子がわしの流派を嫌い、別の流派に弟子入りしおつての」

話はまだ続いた。

おじさんの流派は相手の力を削り、乱し、絶つ剣術らしい
で、息子さんは最強の戦闘集団と言われる流派に行つて
伝承者がいなくなつてここでひっそり暮らしてるんだって

おじさんが剣士だつてことには驚いた

けど、初めて本物の剣士を見たのに何も感じなかった
ゴトツとおじさんが僕の前に父さんがくれた箱を出した

「お前さんと一緒にこの川を流れてきたんだの
どうやらお前さんの物のようだよ」

僕は衝動的に箱を開けた。

中であつたのは一本の剣だつた

それを手に取り鞘から抜くといつしか父さんが
握っていた剣の刀身が姿を現した。

「もしやこの剣は・・・むっ手紙も入つとるの」

箱の中にもう一度目をやると確かに手紙が入つてあつた
手紙を手に取り読んだ

「カイト、大きくなつたら剣士になつて旅に出るつて言つてたよな
そこでカイトに父さんと母さんからプレゼントだ

この剣『音姫』から出る音は呪文詠唱の代わりになるんだ

音を出す際の魔力コントロールはかなり難しいがこれでカイトも魔法が使えるから練習しろよ

音姫を通して一緒にいるから旅先で泣くんじゃねえぞ 父より」

「う・・・父さん」

「演奏呪文の剣・・・いい親父さんだよ」

演奏呪文？初めて聞いた言葉だ

気になつていとおじさんが教えてくれた

演奏呪文つて言うのは楽器を使つて詠唱の代わりに演奏して

魔法を放つ技法で50年前に高度な魔力制御が必要とされて
使える者がいなくなりなくなった技法らしい
剣が使われたのは今までなかったみたい

きつと父さんが僕のわがままな夢のために
頑張って作ってくれたんだろうな

「それでわしからの提案なんだが、お前さんわしの弟子にならんか、
きつと10年もすればかなりの腕に「嫌だ！」なれ・・・」

張り上げた僕の声におじさんは驚いて黙った。
ちよつと声が大きすぎたかな

僕はおじさんの目の前で右手でパーを作る
「半分、5年で強くなってみせる!!」

「なんと、その剣の魔力コントロールの修行もしなくてはいかんの
だぞ」

おじさんは無理だと言っけれど僕はやる気だ。
睨めつける強い視線でおじさんを見る

「・・・ふ、若いのには敵わんな
いいだろう、ただし修行はきつくなるぞ」

「はい!!--!」

「わしは水月流師範、東雲玄水!!お前さん名前は」

「カイトです!!--!」

父さん、母さん、僕は強くなってみせます。

第一話

はじまり（後書き）

どうでしたか？

気に入ってもらえとうれしいです。

第二話

早い旅立ちと初大暴れ（前書き）

能力や剣技がでます。チートじゃないですよ、ね、これ

では、どうぞ

戦闘ってむずかしい

第二話 早い旅立ちと初大暴れ

「水月流・月食!!」

二人の剣士が戦闘をしていた。

キィィィンと刃物がぶつかる音が辺りに響く

何度も響くその音はやがて止んだ

片方の剣士が倒れたのだ。

「はぁ・・・はぁ・・・剣の打ち合いでここまで気を削られるとはな才能かの」

「いやいや、師範はやっぱ強いですよ」
「どうも、カイトです。」

剣術を学び始めて5年が経ちました。

水月流も音姫の魔力コントロールも上達して強くなれました。

「とうとうわしを越えたか、早いものだの・・・して、行くのかカイト」

「はい師範、お世話になりました」

「そうか・・・カイトはもう十分強い、
世界でも通用するだろう、独自に編み出した剣技もある
その力を悪に使うのもよい、カイトの好きにするがよい」

「はい、ではお元気で」

剣を鞘にしまい5年間過ごした土地から旅立つ
川の流れと逆の方向に歩きだす。

40分も歩き続ければ最初の目的の地にたどり着いた。

5年前とはまるで変わってしまった村・・・

立派な工場施設に高級マンションが建っていた。

5年前に大火事があった後すぐに村の土地権を政府の人間が奪って鉱石を自分たちのものにしていた。

あの山賊の通り今の俺には誰が村を燃やすように指示したか見当がついた。

山賊たちの後ろで政府の人間が暗躍しているんだと、

俺は政府の敵に回る、奴らは許せない！！

左腰にある音姫の柄に手をかけて工場施設の上に飛び降りて音姫を鞘から抜いて剣先を突き立てる。

「音撃剣・破音」

ガバアアン、工場施設の屋上が崩壊して大きな穴ができるそこから工場施設内に入り込む

「げほ、何が起こったんだ？」

突然の出来事に辺りは混乱している

戦える魔法使いも少ない・・・

「水月流・月食」

警備の魔法使いも工場施設で働いている人も

手当たり次第に魔力、気が全て削れるまで斬っていく

魔力や気が無くなった人は意識を失いバタバタと倒れていった。

全部で50人、内10人は警備の魔法使いだった。

全員殺してはいない、殺せば政府の人間と同じになってしまうからね
後はこの目障りな建物らを破壊するだけ・・・

「奏でろ、音姫」

柄から音姫に魔力を流して演奏呪文を奏でる。

最初はコントロールに苦労したけど、今では呼吸するのに等しい

「魔法の射手 水の599矢」

放たれた599もの水の矢が建物を削り破壊していく

「終わった・・・」

もうここに用は無くなったし、次はどこに行こうか
ゆっくり、政府の人間を懲らしめに

あっそう言えばここ人里から離れてるんだった、
もうそろそろ日が暮れるし・・・野宿ですか、まあいいでしょ
山の中で安全そうな場所を見つけて腰を下ろす
辺りは既に夜だった

音姫を抜いて俺は奏でた、演奏呪文でも何でもない
ただの曲を奏でるように・・・

時々こんな事をやっている

そうする事で父さんと母さんとお話をしている気分になれる
この音を聴いた魔獣や妖精がやって来る

誰もがこの音に聴き入って耳を澄ましている

それほど音姫の音色は美しかった。

曲が終わると皆ゆっくり自分たちの住処に帰って行った

「綺麗な音ですね・・・」

どこからか女の人の声が聞こえた

「誰ですか!!」

「貴方に敵意はない

ただ曲が聴きたかっただけ・・・」

音姫の曲を・・・

この近くにいた妖精かな？

連合領にはそうゆう類は本来少ないはずだけど案外結構いるのか
姿が見えないから判断しようがない

「それで、もう少し曲、聴かせてもらっていい？」

「ああ、いいですよ」

音姫に魔力を込めて曲を奏でる。

再び奏でられた曲に他の妖精や魔獣が寄ってこない

もう寝ているのだろうか、女の人のためだけに曲は奏でられた

「とても落ち着く・・・いい音」

「もしかして、毎回聴いてた？」

「はい、ですが直接聴くのは初めて」

直接聴くのは初めて・・・？

どうゆう意味だろう、追求はしない方がいいか・・・

それからは姿の見えない女の人とたわいもない話をする

不思議な事に女の人の声は変化がなかった

声の大きさ、高さ、トーンがほぼ常に一定だった。
帰ってくる言葉も「そうですか」など単調なものばかりで
俺が一方的に話しかけているようなものだ

しかし彼女との会話は思いのほか楽しかった。
ここ5年間こうして話をするのは師範以外いなかっただろうが、
不思議な感じだ

「ふあ~~~~」

さすがに眠くなってきた・・・
彼女は平気なのか？

「眠いの？」

「うん、悪いけど今日はもう寝るよ」

「そう、お休みなさい」

次の瞬間、とぶん、と水の音がして気配が消える。
転移魔法か・・・

本当に何者なんだろう
気になるが俺はそこで寝た

チュンチュン

む・・・どうやら朝のようだ
朝日の光が眩しくてしょうがない
ひょいっと身体を起こして2、3回屈伸する。

向こうの方に川があつたな、顔洗うのと食料の調達だ
師範との生活は常に自給自足だったから魚を捕まえるのには自信が
ある。

今日は川魚が3匹取れた。

たき火を燃やして川魚をじっくり焼いていく

ふと昨日の女の人の事を思い出す。

何者だったんだろう、転移魔法はかなり高度なはずなのに
凄腕の魔法使い、山の妖精、はたまた精霊なのか

うーん、どれもピンとこない

でも嫌な感じはまるでなかったし・・・

そう言えば初めてだったな、曲を褒めてくれたのは・・・

「つて、魚が焦げる!!」

まあいつか、いつか聞けばいい事だ

次はどこに行こうかな

確か南に行けばエオスって街に着いて、その東に・・・

メガロメセンブリア

MM正規警備兵 26歳 男 s a i d

あゝまったく首都の警備って暇だよなあ

かといってテロが起こっても困るんだが・・・

とにかくやることはない。

ただ首都の周りを400の正規兵で巡回しているだけで面白くない

お金に困る職じゃねえんだけど、つまらないよな
仕事をバツクレてもバレないんじゃないかなあゝ

なんか3週間近く前にエオスの北にある鉱山の発掘施設が破壊され
たんで

警戒することで最近警備の人数を増やしたんだと

警戒するもなにも、首都メガロセンブリアに攻撃を仕掛ける
馬鹿なんているわけが

ドゴーン！！

「わっなんだ！？」

突然響く爆発音に俺の周りの正規兵たちも動揺してやがる

ピーピーと高い音が鳴る

何やら西側の警備の方で問題があったそうだ

かといって俺たちは持ち場から離れるわけにはいけねえ

向こうが陽動かもしれないからだ、上からの指示が出るまで動けない

ここから遠いけどまだ爆発音が鳴り終わらない。

5分ほどしか経っていないが、MM正規兵が戦闘を続けている。

相手はどれほどの戦力を持ってきたんだ、

親指と人指し指で円を作り千里眼で様子を見ている。

そこではMM正規兵たちが一斉に捕縛魔法を放っていた
範囲が広い、これなら一気に敵を捕まえることができる。

けどその先には敵の集団の姿はなかった

いったいどこに向かって魔法を・・・

その時、千里眼でみた先に一人の人影が見えた。

深緑の髪少年、手には可笑しな剣を持っていて、捕縛魔法を次々と回避しては正規兵に連撃を与えていくが強度の高い鎧に守られた正規兵に効果があるようには見えなかった

が、バタバタと少年の剣を受けた正規兵が倒れていく鎧の中の人間にダメージはいつていないはずだがそのまま勢いは止まらず少年はMM本部の中に侵入していった。

まさか子供が一人でMMを落としにきたって言うのか、認めたくはないが奴の戦闘力はMM正規兵を上回っている。侵入して何を起こすか知らないが、本部には凄腕の魔法使いたちがいる。そして幸運なことに今日は・・・

カイト said

くう~~~~

数が多いでしょこれ、警備兵が来たらあらかた月食で魔力を0まで削って行動不能にしてきてるけど鎧の上からじゃ魔力を削り難いんだよね、

それでも魔力が0になったら自然回復するまで動けなくなるのは大きな利点、回復魔法、状態異常回復魔法も効果がないからね魔力が0になれば少なくとも丸一日は動けないはず、

「侵入者止まれ!!」

前方に鎧を着ていない魔法使いが三人現れた。

「今攻撃を止めれば命だけは助けてやろう!!」

悪いけどそんな提案に乗るわけがない

政府のトップクラス、MM元老院に会って

5年前の村の事を聞き出さないといけないから

そのまま突っ走る!!

向こうもこちらに降参の意思がない事を知り、

戦闘体勢に入った。

戦闘スタイルは二人は魔法使い、一人は双剣の魔法剣士と言ったところか

建物の被害を考えて広域殲滅魔法は撃てないはずだから、
注意するのは魔法剣士の方だね

魔法剣士は迎え撃つ構えをして、魔法使いは後方に回った。

剣士が瞬動で意表を突いてきた。

なぎ払い気味に身体を右回転させながら双剣で

斬りかかってきたのをジャンプしてかわし剣士と魔法使いの間に降り立つ、

魔法使い二人の詠唱が終盤にきていた。

俺は剣士の方を向いて走り出し、今度はこっちが瞬動で意表を突くと咄嗟に反応して斬りかかってくる

同時に魔法使い二人の詠唱も完成して

「紫炎の捕らえ手」「流水の縛り手」の捕縛魔法がくる

素早く剣士の攻撃を右回転しながら右に回避し、

その遠心力も利用して柄の部分で剣士の横腹を強打して通り抜ける。剣士が盾になるように立っている。

まだ回避しようと思えば十分回避可能な時間があつたが剣士は動けずまともに受けた。

「水月流奥義・汜濫」柄で敵を強打して魔力の流れを乱す、つまり、魔力を上手く制御できなくなる」

そのせいで魔力による身体強化が乱れて反応が極端に遅れたのだ

これで魔法使い二人、時間がもつたないからさっさと決める。腰を低く構えて直進する。

魔法の射手 火の49矢と水の51矢の反撃、詠唱せずに魔法を・・・無詠唱呪文、かなりの使い手だ

瞬動でかわして一気に距離を詰める。

魔法を使った技後硬直で動きが止まっている、

チャンスだ、魔力を体外に放出した直後は制御が乱れて魔力を大量に削る最高の瞬間！！

五月雨の如く斬りつけた魔法使い二人は魔力が空っぽになって意識を失った。

剣による傷は浅い、元々音姫は敵を斬るのが目的じゃないし、水月流は刀身の周りに魔力を削るためのノコギリ状の気を纏わせているからね

にしてもかなり消耗したな、早く元老院を捜し当てないとこの建物のどこかだと思っけど最上階にいるかな・・・だとするとまだ半分しか上ってない、急ごう！！

ゴッ！！！！・・・

鳩尾に強打を受けた鈍い音がして、
ふわっと後方に身体が浮いた

何とか踏ん張って倒れずに済んだ。

正面から軽く笑みを見せながら渋い男が現れる。

「テロと聞いてやって来たけど、まさか君のような子供がね・・・
悪いけど拘束させてもらうよ」

「・・・A A Aの高畑・T・タカミチ」

修行当時師範が持ってきた新聞によく載ってた人だ
大戦期に「紅き翼」で英雄と共に行動してたって言う
まずい展開になっちゃったね、こんな大物に遭遇するなんて
それでも突破しないと

「奏でろ、音姫」

演奏呪文の音を奏で高畑の動きに注意する
さっきの攻撃、魔法でも気でもなかった。
技の正体がわからない、水流障壁を展開して様子を見る。

「音が出る剣・・・変わった武器を持っているね、
その音は幻覚を見せる類のものでもない、すると身体強化か何かか
い？」

「・・・」

こんな格上相手に質問に答える余裕ないんですけど

高畑は手をポケットの中に入れた。

あれが高畑の構えなのか、音姫を握る手に力が入る。

パパパパパンツ！！！！

突如水流障壁が衝撃の嵐を受ける。

数秒間で障壁は突破されて二発喰らう

俺が後ろに大きく距離を取ると衝撃は襲ってこなかった。

ダメージを受けたけど、その甲斐はあった。

あの技の正体はただの拳圧、魔力を使って拳速を上げている
目では追えないほどだ、けど射程距離もある

俺の演奏呪文も完成した。高畑もまだ油断している、やるしかない

「水精大瀑布！！」

「何だって、無詠唱呪文・・・いや遅延呪文か」

水圧で押し潰そうとしたが先ほどの拳圧を大量に放ち防がれた。

しかし、水精大瀑布に隠れて後少しと言う距離まで接近することに
成功した

高畑はポケットから手を出した。

近距離じゃ使用できない技のようだ

魔力を纏った右ストレートを左手で払い、

右手に持った音姫で水月流奥義・氾濫を当てる。

「ぐっ！、これは・・・」

体内で魔力が乱れるのを感じた高畑は焦った顔を見せた
ここで決めないと俺に勝機はない

「ハアアアアア!!」

渾身の力を込めた月食で高畑の魔力を削っていく、
初太刀はかなり魔力を削ったけど、それ以降は高畑が魔力を
ある程度制御して多くは削れなかった

魔力を乱しているはずなのに・・・
これが英雄と言われる実力・・・

ズドンッ!!

腹部に重い一撃が入る

障壁を展開していなかった俺の身体は30mほど吹き飛んだ

「ぐう・・・まさかあの短時間で魔力の乱れを抑えたなんて」

「いやあ危なかった、あのままやられてたら
魔力が底を尽きるところだったよ」

クツ・・・ダメだ、

今の一撃でまともに体勢が・・・

高畑は再び自分の手をポケットに入れた。

またあの拳圧を飛ばしてくる気だ、耐えないと・・・

「水流障壁!!」

「・・・」

パパパパパパンッ!!

「ガハツ・・・」

負けてしまうのか、この5年間頑張ってきたのに・・・
ゆっくり高畑がこっちに向いて歩いてくる

「かなり手こずったけど、身柄を拘束させてもらっよ」

ここまでなのか・・・

キュアッ!!!

「ぬうつ!!」

俺が諦めようと思った時、大量の魔法の射手が降り注いだ
しかし、その魔法の射手は鋭くて細長く本物の矢のような形をして
いた

それによつて破壊された壁や床の壊れようは

俺の知る魔法の射手とは比べ物にならなくてまるで別の魔法のよう
だった。

「ふんっ・・・本来、無駄な事はやりたくないんだが」

そう言いながら一人の姿が現れた。声からして男だ

少し長めの白い髪、

紫地に斜めの赤いラインがある盗賊服

両手見たことのない模様が描いてある密着した白地のグローブ
そして「義」とでかく書いてある面をつけていた・・・

第二話

早い旅立ちと初大暴れ（後書き）

と言うわけで原作キャラが登場しました。

あと二、三話で原作介入の予定

次話は完成次第投稿します。

名前はでませんでしたが登場原作キャラは二人いました

・・・えっ初見わかった人いるの？

第三話

対面

義賊&少女（前書き）

文字数が前より少ない

どうやってもグダグダしてる気が・・・

文才が欲しい。それではどうぞ

第三話

対面 義賊&少女

タカミチ said

テロを起こした少年を拘束しようと思ったら異様な形をした魔法の射手が飛んできた

矢の一つ一つが凄い威力・・・並みの力じゃない

魔法に射手が止むと同時に攻撃してきたと思われる男がやって来た。面をつけているが声である程度判断できる。年も若い。

「君は何者だい？」

「・・・真の正義の味方」

「ふざけているのかい」

「俺はマジなんだが」

正義の味方を名乗るのであれば拘束の邪魔はしないでほしいね分かったことはただ1つ彼は敵だっていう事だけだ。

それにしても今戦闘するのはきつい・・・

筋肉の疲労何かはないけど魔力をかなり消費しきっている。

「来ないのか？・・・ならこっちから行くが」

彼は左手を真横に上げる。すると左のグローブから2mほどの弓が現れる。

どうやらあれが彼の武器のようだね

遠距離型の武器なのか・・・いや、詮索は後だまずは先手を打つ！！

キュキュキュッ！！ 居合い拳を面をつけた彼に放つ
ただ僕の居合い拳は全て回避されてしまった。

この拳速に反応できるの奴はそうはいないはずなんだけどね・・・
回避した面の男は弓を僕に向けて右に掌で弦を引く、おそらく魔力
でくっ付けているのだろう

弦を引いた後にはそこに矢の形をした高密度の魔力が存在していた。

「魔法陣・散・展開」

そう言くと面の男の前に盾のように魔法陣が現れる。

シュパツと彼は弦を離すと矢は魔法陣を通過する。魔法陣を通過し
た矢は百数もの数に分かれた。

まるで雨のように降り注ぐ魔法の矢は辺りを破壊しつくしていった。

ふと気付けば面の男もテロの少年もいなくなっていて、壁が破壊さ
れて大きな穴が空いていて

そこからは広大な空が見えた。

カイト said

えっと、今俺はMMの上空を高速で飛行中です。

どこからか召喚されたと思われる白い竜の背中に乗っています。尻
尾も合わせて体長が4mにも満たない大きなで前足は細く後ろ足は
普通くらいで翼が広い竜です。

そして隣には先ほどの面を付けた人がいます・・・何この状況、イ
マイチ理解ができない

あっという間にMMから遠くに飛んで近く of 森の中に降り立った。

竜から降りて森の地面を踏む

まずはお礼を言わないといけないな

「助けてくれて・・・その、ありがとう」

「ったく、お前が妙なことしなければ簡単に逃げれたってのに・・・」

「うつ・・・すみません」

何か怒ってる、俺何か貴方に悪いことしましたか・・・

「・・・あの、貴方はあそこで何をしてたんですか？」

「俺が何をしていたか？・・・見て分かるだろ」

カポツと面を外して鋭い目でこっちを見てきます、目付きは悪いですが面の下は結構な美形でした。俺と同じ人間種ですね。

「盗み以外に何がある」

「盗みッ!？」

思わず聞き返してしまいました。服装からしてそうかとは思っただけど

まるでそれが当然のことのように答えるとは思いませんでした。MMに盗みに行くって自殺行為な、いや人のこと言えないか・・・でも盗むならもっと他に簡単な所があるんじゃないや

「ルル、ご苦労さま少し休んでくれ」

「キュオオオオ」

ルルと呼ばれた白い竜は突然消えた。どうやら彼の右腕にある腕輪の中に入っただけらしい。空間系の魔法具か何かだろうか、あの中に盗んだものが入れられているのかな

「今回は俺が偶然いたから助かったが、普通なら拘束されてたぞ」

「・・・そうですね」

実際、あの時反撃する気力も残ってませんでしたから

「それに実戦経験も少ない、いきなりMMを狙うなんて無謀すぎる、何でそんな無茶をしたんだ」

「それは・・・」

俺は5年前に起こった出来事を彼に話してみた。

政府が村の資源欲しさに山賊を利用して襲わせたこと・・・まだ確証のない話だけど

彼は真剣に聞いてくれた。話を聞いた後、彼はこう言った。

「その話は本当だと思う」

俺はその言葉に衝撃的なものを受けた、彼はそのことについて何か知っているようだ。

「実は十数年以上前から政府の上層部には資源を大量に欲しがっている連中がいてな」

亜人たちの部族対立を煽り、殺し合わせて土地ごと奪っていったんだが

それじゃ満足できないのか資源のある人里離れた人間種の土地まで手を出し始めたらしんだ」

「そんなことが・・・」

やっぱり俺の村は政府に消されたと思って間違いなさそうだな

それにしても政府の人間が昔からここまで腐っていたなんて・・・あれ、この人歳はいくつ何だろう、俺と2、3しか変わらないと思うんだけど

やたらと昔の事に詳しいな・・・

年齢を聞こうとしたけど何か考え込んでいるみたいで話しかけるのを止める

「お前さ、俺と一緒に義賊やってみないか？」

「へっ？」

義賊って言うとお金持ちの人から物を盗んで貧しい人に与えるって言う・・・

「さすがに俺一人じゃ魔法世界を全部を回るのは疲れる、だが二人なら半分になるわけだ」

いや魔法世界の半分でも十分疲れそうだけど

「十年やってきたがまだ回ってない所が山ほどあるんだ、頼む」

へ？十年？この人本当歳はいくつなんだ・・・

「俺は15なんだが」

「心が読まれたっ！！読心術！？」

「口に出てたから・・・で、やるか？やらないのか？」

義賊・・・盗みか、そうゆうやり方もありなのかもしれないな、殺す必要もないし、何より人の助けになる。今の俺に合っているかも・・・

「分かりました、やります」

「そうか助かる、俺はイズルよろしくな」

「俺はカイトです」

「よし、カイトこの魔法世界地図を見てくれ、赤印がある魔法施設から金品を盗んで

換金所で金にして食料なんかを買って青印のある街や村に分け与えてくれ」

「はい？」

「一か月ほどで頼む、終わったらアンティゴネーで落ち合おう」

待つてください、その印から印の間が2000km以上離れてるんですけど

しかも複数印が・・・、さらに帝国領、この辺りってジャングル地帯で交通機関もそう無かったはず

とにかく色々ツツコミたいところが

「えっと、これが盗みに使う空間系の巻物と顔がバレないように面

を一つやる」

俺の手元に巻物と面が渡されます。面にはイズルさんと同じように「義」と書かれてあります。

どうやら俺にツツコム隙はないようです。しかし今日初対面でここまで親しげにはなすとは……

「それじゃ頑張ってくれよ、俺もう行くぜ」

「えっ！ちよつと待って……行っちゃった」

おお、イズルさん速い、もうあんなに小さく見える。

義賊って一分一秒を惜しむ忙しいものなんだ……よし俺も出発しないと、

巻物の中に面を入れて全力で走り出した。

そう言えば子供の頃、こうやって自分の足で世界を回ってみたいって言ってたっけなあ……懐かしい

でも実際は結構疲れるわけだけどね

三十分くらい全力疾走していると身体に疲れを感じてきた。

高畑と戦った時のダメージがまだ残っていたみたいだ。

俺は近くの気に寄りかかって座り込んだ。まだ40kmほどしか移動できてないが

しばらくここで休憩することにする。

初めての強者との戦闘はいい経験になった。お陰で身体はボロボロだけど……

実戦経験の差が大きく影響してたな……

「随分疲れているみたいですね」

聞き覚えのある女の人の声が聞こえた。三週間前に音姫の曲を聴きに来たあの女の人の声だ。

俺は驚いた。突然声を掛けられたのもそうだが、その声の主が俺の目の前、正面にいたのだ。

薄青い長袖の服にズボン、肩まで真っ直ぐ伸びた白い髪、背丈は俺より少し低いくらいの少女だった。

何か言葉を返そうと思ったが、目が合った瞬間、身体の中で何かが高鳴り言葉を忘れてしまう。

何がどうしてしまったのか分からなかった。分かることは胸の鼓動がうるさくなったと言うことだけだ。彼女は無表情でこっちを見ている。

「どうかしましたか？」

「いや、多分疲れが溜まっているだけだと思う」

激しい戦闘の後の全力疾走で無理をし過ぎてしまったからか？

「戦闘ですか？」

「ああ、MMの本部にね、見事にやられたけど・・・」

あつ、普通に言ってしまったけど大丈夫かな、これを聞いて驚くか、バカにされるか、呆れるか・・・

「・・・弱いんですね」

グッ・・・まさかそんな言葉が返ってくるとは思わなかった。
精神的に大きなダメージを受けました・・・

「うつ・・・でも、実戦経験を積みれば俺はまだ強くなれるから」

「そうですね」

何故だろう、見た目的に同じくらいのはずなのに何かこう・・・
上手く言えないけど負けている気がする。特に精神的な所が

「そう言えばさ、君の名前って聞いてなかったよね、俺はカイトって言うんだけど」

「セクストウム」

「セクストウム？変わった名前だね」

「そう？」

無表情だが辛うじて不思議に思っていることは分かる。

「座りなよ、立ったままじゃ疲れるでしょ」

俺は立ったままでいた彼女にそう言うと、彼女は俺の隣に座った。
お互いの距離が近くなって左を向けば彼女がいる状況です。とりあ
えず何か話題を

「君ってさ、何かの魔法団体に入ってたりするの？」

「入ってないけど」

その言葉を聞いたとき、嬉しいと言いか良かったと思った理由は分からないけど

「そうなんだ、じゃあ普段何をしているの？」

「世界の救済・・・」

世界の救済、何かスケールの大きい魅力的な言葉を聞きました。
俺は凄く興味を惹かれた。

「それは凄い、でも君ならできそうな気がする。仲間とかいるの？」

「います、少人数ですが」

「そっか、俺は・・・仲間が一人いる・・・のかな？」

イズルさんとはまだ会って数時間しか経ってないけど、仲間って言えば・・・仲間だよな

くすつ・・・ほんの少し彼女が微笑んだ、その姿は天使のように美しかった・・・

「曖昧ですね」

「曖昧か・・・そうだね」

それから話すことにもまた彼女の言葉は単調なものばかりだったけど、

その言葉一つ一つに俺は耳を澄ました。そしてたくさん話しかけた。今はどうしてか彼女と長くいたい気分だった。

イズルさんの時とは違う、やはり彼女に対しては自分はおしゃべりになるみたいだ

「・・・音姫、奏でようか？」

「疲れてないの？」

「このくらい何てことないよ」

もちろん嘘だ、まだ疲労が残っている。それでも俺は音姫を奏でようと思った。

強がり・・・そう、ただの強がり・・・

「そう、ならお願い・・・」

「喜んで」

音姫をゆっくりとした曲調で奏で始める。

音姫は魔力の込め方次第で様々な音に変わることができる楽器でもある。

その音に惹かれるように近くにいた生き物たちが集まって来た。

彼女も目を閉じて耳を澄ましている。種族を問わず音姫を中心に輪ができたみたいだ・・・

演奏が終わった後でも種族が違う者同士でも仲良くしていた。

こうゆうのを見ていると音姫を作った両親を誇りに思える。

「そろそろ行こうかな」

俺がそう言っていると彼女は立ち上がり、手を差し伸べてきた。

「本当はまだ疲れが残っているんでしょう」

ああ気付いてたんだ、気付かないふりをしてくれたら嬉しかったんだけど・・・恥ずかしい

彼女に甘えてその手を掴む。か弱そうな彼女の手から一瞬だけ体温を感じた。

「ありがとう」

「私も、無理してまで聴かせてくれてありがとう・・・カイト」

「えっ・・・べっ、別に感謝されるようなことじゃないよ／＼」

名前で呼ばただけなのに胸の辺りがざわついている、いままでこんなこと一度もなかったのに・・・

だけど悪い気はしなかった。むしろいいと言うか・・・

「あのさ・・・セツ、セクストウム／＼」

「何、カイト？」

「その・・・そっちの予定が無い時さ、いつでも来てくれよ。音姫・
・・・奏でるからさ／＼／」

「そう、また・・・会いに来る。」

俺は嬉しさの感情が溢れ出したように身体が勝手にガッツポーズをした。

今の俺の顔が笑顔になっているのが分かる。しばらくこの気持ちに浸った後、

行ってくる・・・とセクストウムに声をかけて義賊活動を開始した。

第三話

対面

義賊&少女（後書き）

これは展開が早いのか分かんないな・・・

もう少しゆっくり進めたい気もするけどそろそろ原作に介入したほうがいいのか？

あとカイト視点が多すぎか？オリキャラの個性が薄いのか？
改善する点が多い・・・

これから頑張ります。

第四話

義賊活動の日常（前書き）

うゝん八割カイト said

もうカイトメインで良いような気が

それじゃどうぞ

第四話

義賊活動の日常

帝国傭兵 男 s a i d

「仮面だっ！仮面の盗賊が現れたぞ！！」

遠くの方で叫ぶヘラスの警備兵がいた

俺は虎の亜人種で帝国で傭兵として雇われていた。

そんな俺がシレニウム古代魔法具博物館の警備の手伝いをやらされている時だ

仮面の盗賊と言うのが現れたみたいだ

俺も詳しいことは知らないが最近有名に成りつつある盗賊だそうだ
そいつの特徴は「義」と書かれた仮面を付けていて、

金持ちや大きな魔法施設ばかりを狙うこと以外分かっていない。

51

しかも、盗んだ金が直ぐに無くなるのか知らねえが

週に1、2回盗みを働く、同時刻に犯行が起きたこともあり数人の
組織だと噂されている。

その仮面の盗賊が今ここに盗みにやって来たわけだ

客のいない夜の博物館に・・・

「ウワアアアアアアアアアア！！！！」

また警備兵の悲鳴が聞こえてくる。

盗賊風情が、博物館の中をうろちよると移動しやがって

俺は警備兵を十人引き連れて悲鳴を頼りに追いかける。

そして展示室にて奴を追いつめた。警備兵で周りを囲み逃げ道の無いようにする。

黒地の盗賊服に首に長い灰色の布を巻いて「義」の仮面を付けている。

初めて見たが噂通りの姿だ

こいつの首には10万ドラクマがかかっているからな、絶対逃がさないぜ

「さあ観念しろ仮面の盗賊！！貴様の悪事もこれまでだ！！」

「・・・どうやら警備兵はもうこれだけしかないようだね」

「ハッなんだ負け惜しみか？」

仮面の盗賊は俺の言葉を無視して展示されている魔法具をまじまじと見てやがる。状況分かってんのか？

「いい品々だ、ありがたく貰って行くよ」

「貴様舐めてんのか！！」

もう我慢ならねえ、この気に入らねえ盗賊を殺すことにする！！
困んでいる警備兵に攻撃を命令する。

全員奴の言葉に腹を立てていたらしく顔に青筋を浮かべている。
各々が自分の獲物で盗賊に襲いかかる。奴も腰に下げた剣を抜いた。

「水流障壁」

警備兵たちの攻撃は水の障壁に全て防がれてしまった。
しばらく様子を見ていたが一撃も盗賊に攻撃が当たることにはなかった。

「貴様ら退けッ！！俺がやる！！」

情けない警備兵に苛立った俺は戦闘に参加した。手柄は俺が全部貰うからな！！

それからの奴は防戦一方、俺のバトルアックスのパワー攻撃に手も足も出ないようだな

バトルアックスを大きく振りかぶり地面を叩き割る勢いで振り降ろそうとした

「そろそろ蓄積したかな」

何を言っただやがるこいつ（ブシャツ）・・・何！？

身体の内側で何かが斬れる痛みを感じた、警備兵も同じようだ。大したダメージではないが突然のことで動きを止めてしまう。

「終わりです、水月流奥義・津波」

奴が剣を横に振ると大量の水が現れて俺や警備兵たちを呑み込みやがった。

この水圧、身動きが・・・うつ・・・何だ・・・力が抜けていく・・・

俺はそこで意識を失った。

カイト said

音撃剣・忍音じゆんおんの超音波の蓄積で魔力経路にダメージを与え

水月流奥義・津波で魔力を荒削り・・・

相手が格下だったけど実戦レベルに来たかな時間が掛かるのがあれだけ

さてと、盗むものは盗んでさっさとずらかろう

ここから一番近い換金所は140km南か、飛ばして行つこつと
さあ見よ、これが世界を走り回つて身に付いたこの脚力を、これが
盗賊の足だ！！

と言うわけで一時間走り続けたら換金所に到着しました。

場所は今は使われなくなった軍事施設の地下に作られた空間だ。
古びた扉の前で止まりノックを四回してイズルさんに言われた
盗賊の合言葉を言うと、ギギギツと扉が開いた。

中には武装した見張りが十人ほどいる、
奥に進むと少し広い空間があり30半ばの男性がいた。

「おおカイトじゃねえか、今回はどんな盗品を持ってきた」

彼はここのオーナーであるボードンさん、目利きも良くて確かな価格で

換金してくれることで盗賊の間で信頼できる人だ。俺は今回で三回
お世話になる

「盗品はこれだよ、いくらになる？」

「ほうこれはまた良い品だな・・・」

巻物から出した品を取って一つ一つ時間を掛けて丁寧に鑑定していく
盗品を見るその目は鷹のように鋭い

「よっしゃ、この盗品ら60万ドラクマで手を打たねえか」

「おっけー」

60万ドラクマ今回は少し多く盗み過ぎたか、ほどほどに盗まないとカモがいなくなるし

政府の警備が少数の盗賊を阻止できないと世間が知れば困るだろうからね

上手く情報が漏れないようにしてるみたいだね

お陰で仮面の盗賊は世間ではただの噂の存在になってるよ

「ほらよ、60万ドラクマ確かに入ってるぜ」

ボードンさんから60万ドラクマの入ったアタツシケースを渡される

この瞬間って自分が良いことしてるのか悪いことしてるのか分かんなくなってくる・・・

「確かに受け取りました」

「あいよ、またのご利用待ってるぜ」

買い物に行かないと、その度に幻術を使わないといけないけど見かけ変えないと怪しまれるからなあ

近くの街に寄って買い物、その後村に届けに行く・・・

合計走行距離2300km、今の俺なら二日で付く距離だね

「そうだカイト注意しろよ、義賊ってのは一部の盗賊の間で嫌ってる奴もいるからよ」

「分かってるよ」

実際四日前に襲われたしね、まあ急いでたから走って逃げただけで俺って足がかなり速くなってたんだ

たったの数秒で300m突き放したんだ。風になった気分だったよ俺は通路を戻って外に出て近くの街に向かって走った。

草むらの中を走り抜け、木から木へ飛び、崖を越えて行った。

街に着いた俺は早速幻術をかけて買い物に出かける

買うものはいつも決まって食料とその種、生活必需品、衣服など毎回のことだが商品をまとめ買いしたときに

周りに見られるのはどうにかならないものか・・・

目的の品を買い終えてさっさと街の外へと向かう、6年間遊んで暮らせる金も一瞬で消えてしまった。

買ったものは巻物の中にすべて収納しえある。

「おっと兄ちゃん、ちょっと待てや」

ガシツと右肩を掴まれました。振り向けば質の悪そうな男どもがニイと笑っています・・・気持ち悪い

しかも兄ちゃんだって・・・あつ幻術で今20歳の身体なんだった

「結構な買い物しよったな、へっへっへボコられなくなかったら金くれや」

ぐへへへっと周りの男どもが笑い声を響かせます。

近くで見ている人たちが怯えているじゃないですか・・・

どうやら街のゴロツキみたいだけど相手にしている時間が無いんだよね

イズルさんからの期限が近いんですよ少しの時間も無駄にできませんつまりここでの選択肢は・・・

「ぐふふつ有り金全部出してくれるとありがてえんだけどな、そしてたら毎日酒を飲んでそれから・・・」

何やら勝手な想像を膨らましているみたいだけど完全に隙だらけだ、そして気持ち悪い・・・

ダンツと地面を蹴りその場から逃げた周りに警備兵呼ばれたら厄介だからさ

「・・・それから奴隷も欲しい美人の女が・・・ぐへへへ」

「兄貴！兄貴ッ！あの野郎逃げて行きますぜ！！」

「ぐへへそれから・・・何ッ！！、直ぐに追いか」

「無理です！！もうあんな遠くに」

「そっそんな・・・ノ~~~~~~~~！！！！」

改めて思う、俺って足速くなってる・・・

気持ち悪いゴロツキから逃げ出し、山を三つ越えて野生の魔獣を避けて

走ること数十時間、森の中に隠れた小さな村を見つけた。

村の人が俺の存在に気付くと警戒・・・と言うか怯え始めた。

腰に剣（音姫）を差して面を付けた盗賊服の人が来れば当然の反応か・・・

「お主は何者じゃ・・・何の用があつてここに来た」

犬の耳が垂れたようなおじいさんが言った。当然亜人種の村だ。どうやら村長と言つべき人のようだ、おじいさんの周りに村人が集まる。

ざっと60人位か、全員身体が痩せ細っている、ろくに食べるものが少ないのだろう

ん、どうやってこの警戒を解こうか・・・

そっだイズルさんのような感じで言ってみよう

「分からないんですか？」

「分からんから聞いとる」

「盗賊服に身を包み仮面で素性を隠した人がこの隠れた村に現れた・・・こんな剣をぶら下げてね」

村人たちは完全に沈黙していた。中には我が子を強く抱きしめる親がいる・・・

あれ、なんか罪悪感が・・・

「そんな奴のすることはただ1つ・・・」

村人たちは漂う緊迫感に息を飲んだ。

俺は巻物を取り出し中に収納されている物を出すべく巻物の術式に手をかざした。

パアアアと巻物から光が漏れて村人たちは驚いて皆目を閉じてしまっている。

少し間を空けて一人一人目を開き始める。全員目の前の物に混乱を隠せないようだ

「プレゼント以外何があると言っんです」

「……………えっ？」……………

村人たちのほとんどがハモりました。そして硬直してます。

期待した反応ではありませんでしたね……

巻物から出した山のような食料や魔法具や衣服を見て子供たちがま
ず近づいてくる

見たことのない大量の食料にきゃっきゃと無邪気に喜んでいます。

大人の人たちも次々に近づいて、ありえないつと泣きながら言う人
も中にいました。

まあいつも通りにいきますか、えっと時間は11時ぐらいか、丁度
いいね

「はい、皆さん今から昼食を作りましょう。男性陣は田畑の拡張
の方をお願いしますね」

こうやって村人たちと仲良くするのも義賊として大切なことだ。

初めは警戒していた人たちもすっかり気を許している。

俺は男性陣と一緒に田畑の拡張を手伝っている。

明らかに村の食事が賄える大きさでない、持ってきた種も撒かない
とね

そうやっているると昼食の方が作り終えたようだ。

作業を一時中断して食事を取ることにする。作られたのは見たこと
のない料理だった

何でも前にいた村の郷土料理らしい、俺は顔から面を外し料理を口に運ぶ

一言で言うとも美味しかった。郷土料理と言うのは他の所でも食べたが色んな料理があって面白い

ん？、村人たちがこつちを見て固まっている・・・

ああ面を外したからだろうね、前にも同じ反応を見たからそうだ

「お主、子供じゃったのか」

「ええそうですよ」

まるで信じられないものを見たかのように驚いていますね。

村人たちに簡単に俺がこうなった経緯を話します。

聞き終えた村人たちは涙を流して俺に頑張つてと温かい言葉を掛けてくれました。

食事を食べ終わると田畑の拡張をして、種を撒きました。

与えた食料が無くなる前には実るでしょう

食料は保存魔法具の中に収納してあるから腐る心配はない

子供たちには遊び道具を渡して遊び方を教えたりした。

そろそろこの村から出ないと期限に間に合いそうにないので・・・

「それじゃ俺はこれで失礼します。」

「待ってくれ、せめて何かお礼をさせてもらえんか」

気持ちはあるがたいんだけど時間が無いんだよね

「いいんですよ別に、これが義賊って奴ですから」

「そうですか・・・本当にありがとうございます」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「お前の活動応援してるぜ!!」

「また村に来てね」

「はい、皆さんありがとう!!」

父さん、母さん、義賊やって本当に良かったって思えるよ・・・

第四話

義賊活動の日常（後書き）

音撃剣・忍音

人間には聞こえない超音波で相手の体内に音を蓄積させ
魔力経路にダメージを与え魔力が漏れやすくする技

水月流奥義・津波

気を練り上げて大量の水で広範囲の相手を呑み込み気や魔力を奪っ
ていく技、

この技だけだと力は急激に奪えないが
技の組み合わせで力を急激に奪えれば相手が水から抜け出す力を失い
そのまま力をすべて奪うことができる

次の話で原作介入前までいけそうです
感想待ってます

第五話

いざ、旧世界麻帆良（前書き）

来ました、フル、カイト said!!!!!!!!!!!!!!

・・・だからなんだってことですよ、内容が大事ですし

それじゃあどうぞ

第五話

いざ、旧世界麻帆良

カイト said

今回の目的を果たして俺は待ち合い場所のトリスタンのオープンカフェに向かった。

既にイズルさんは到着していてテーブルの椅子に腰を掛けてアイスコーヒーを

飲んでいた。氷はまったく溶けていない。

俺も向かいの椅子に腰を掛ける。

因みにイズルさんは灰色、俺は白いコートを着ている。

「仕事をこなすのが早くなったな、この数ヶ月で大したものだ」

「いやあ、それほどでも」

そりゃあんなに走ったら嫌でも速くなりますよ足が

最初の際は三日遅れてしまったけどね

いま思えばわざと期限を短くしてたんじゃないだろうか・・・

「それでイズルさん、今度はどこを盗むんですか？」

「いや、今回の仕事は少し違う」

「違うって何がですか？」

「まあ待て、まだ一人来ていない奴がいる」

他に誰かが来るなんて初めてだな・・・

共同作戦でもやるんだろうか・・・

「おーうイズル君、待ったか？」

待つこと20分、帽子は被ってないですが西部劇のガンマンの格好をしたボサボサの黒髪のダルそうな成人男性が棒付きのアメ舐めながら現れました。

「・・・誰ですかこの人？」

「カイトは初めて会ったんだっただ、紹介する情報屋のラフェールだ」

「あんたがカイト君か、よろしくな」

「はあ・・・よろしく」

ラフェールさんと言う情報屋のこの人が今回の仕事にどう関係してるんだ・・・

「今回の仕事はラフェールの依頼だ」

「ラフェールさんの？」

「そうだ、俺はラフェールからの依頼をこなすことで情報をタダでもらっている。つまりそう言うことだ」

え〜とつまり情報をもらう代わりに働けっことですね
今までこの人から隠れた村の情報を聞いてたのか

「分かりました。で、具体的に何をすればいいんですか？」

「簡単だ、旧世界にある麻帆良学園つつうMM元老院の下部組織の
詳しい情報がほしいんだ」

「なるほど、旧世界にある故に正確な情報が手に入り難いから手を
貸してくれと」

「その通り」

おお、話がどんどん進んでいくラフェールさんが掌を上に向ける
掌には小さな魔法陣が描かれてあつてうつすらと輝きだす

ポツツと言う可愛らしい音を立てて掌サイズで二頭身の悪魔が召喚
された。

悪魔の手にはノートとペンと双眼鏡を持っている・・・可愛い

「クウ〜〜〜」

「こいつは自分の使い魔のアズ、諜報用に育てた悪魔だ。

仕事はアズを連れて行き情報を取ってこさせること、簡単だろ？」

「ふむ、だが麻帆良は学園全体に結界が張り巡らされてるってこの
前言ってなかったか？」

「ええっ！！それじゃあ麻帆良に入ったら直ぐにバレちゃうじゃない
ですか！！」

ちゅちゅちと口を鳴らしながらラフェールさんは右手の人指し指を立てて

左右に振ります。決してアメを舐める音ではありません。

「まあ待て話はまだ終わってねえぜ」

「何か良い作戦でもあるのかラフェール？」

「作戦ってほどじゃねえさ、この前別の諜報用使い魔をメガ口に忍び込ませたら面白い情報を手に入れてな」

「面白い情報ってなんですか？」

ニイッとラフェールさんの表情が変わります。

最初に会ったときのダルそうな姿はそこには無くなっていました。

「今から五日後の夜8時から12時までの間、理由は分らんが学園結界が停止するらしい」

「8時から12時の間だけか？」

「その通りだ、そのよ四時間の間にできるだけ多くの情報を取ってきてほしい」

なるほど、確かに今までの仕事とは違いますね

旧世界ですか・・・師範がいた故郷がある所ですね

何だか興味が出てきました。

「分かりましたラフェールさん、俺頑張ります」

「おお頼もしいねカイト君、期待してるぜ」

そう言うラフェールさんは周りから見えないようにゲートポートの偽造パスポートと転移魔法符一枚を俺たちに渡してくれました。偽造パスポートって・・・そんなもの作れるんですね

「よし、なら行くかカイト」

「あつちよつと待って下さい」

「どうした、何かあるのか？」

いや別に何かってことじゃないんですけどね
道具とかほとんど持ち歩かないし

「ラフェールさん」

「ん？自分か？」

自分に対する質問かとラフェールさんがこっちを見ます。
俺はラフェールさんの使い魔のアズを両手で掬います。

「この子はアズ君ですか？それともアズちゃんですか？」

グッ・・・イズルさんが呆れた目で俺を見ています・・・

これは重要なことなんですよ

「性別か・それで言ったらアズはメスだぜ」

ふむふむ、つまりこの子はアズちゃんって言うことですね
では、これからはそう呼びましょう

「ありがとうございます。それじゃあイズルさん、アズちゃん、行きましょう」

「クウ~~~~」

「・・・ああ、そうだな」

イズルさんのテンションが低い気がしますですが俺はアズちゃんを服のポケットに入れてMMのゲートポートに向かって進み始めます。

そのとき

「ああ、そうだ」

ラフェールさんが何か思い出したみたいで俺たちを呼び止めます。

「ついでに得た情報なんだが、麻帆良には英雄ナギの息子のネギってガキが修行としているらしい」

英雄ナギ・・・

息子がいたのか、確かに他の人が聞けば驚くべきことなんだろうけど・・・

「関係ないな、俺たちは盗む・・・それだけさ」

イズルさんの言う通りだ、英雄の息子だからって俺たちのすること
は何一つ変わらない。

ただ盗んで、苦しんでいる人々に少しでも幸せになつてもらえるよ
うに・・・

ましてや英雄の息子、政府側の人間、今まで戦ってきた奴らと同じだ

「そうですよラフェールさん、俺たちは盗人なんですから」

「・・・そうだな、要らぬ情報だったな、健闘を祈る」

俺たちは再びメガロに向かって進み始める。

街を出て人がいないのを確認するとトップスピードで走り出す。

二日もあればメガロに着くくらいの速さだ

つい数ヶ月前まで速すぎると思ったイズルさんのスピードに俺の足
がついていつている

俺も相当な実力者になつてきているってことかな・・・

そう言えばイズルさんってどんな戦闘をする人なんだろ

弓を使う以外知らないんだよな・・・

「あの、イズルさんってどんな戦い方をするんですか？」

「戦い方？・・・そう言えば話したことなかったな」

高速で移動中で話す余裕がある自分に感心しながら

イズルさんの答えにどこか期待している自分がここにいます。

ですがイズルさんは何やら話しずらそうな感じですか？ ・ ・ ・ ダメか？

「 ・ ・ ・ 俺は遠近どちらでも戦えるが遠距離の方が得意だ」

まあ、武器からいってそうでしょうね、これは予想通りと言つか普通ですね

「それと ・ ・ ・ 」

「それと？」

「毒を使う、と言っても神経が麻痺する程度だが ・ ・ ・ 」

毒ですか！？なんと姑息な響き ・ ・ ・

けどどこかカッコいいです。

「毒薬はいつも持ち歩いているんですか？」

「 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 」

この質問に対しての言葉は返ってこなかった。

もしかして触れてはいけないことだったのか ・ ・ ・

それを最後に今日はお互いに何も話さず辺りが暗くなる前に安全な寝床を見つけ、木の上で眠りました。

朝になると直ぐにメガロに出発します。

義賊をやってから朝パツチり起きるようになりました。

脳は覚醒状態、起きて速攻で走り出せますよ

それから数時間でメガロに到着しました。まずは食事を取ろうと店に中に入ります。

そこはピザの専門店でした。メガロ、及び近辺の街の料理は旧世界にも

あるみたいだ

俺の村にはそうゆう料理は少なかったが・・・

あつ、修行当時に師範が作ってくれた魚の塩焼きが食べたいなあ・・・

・

塩って言う調味料をかけるだけで美味しくなるんだよね

魔法世界じゃ手に入らないみたいだし・・・分けてもらえばよかったなあ

まあ今食べてるピザも中々いけるけどね、

アズちゃんにも周りに客に見えないように食べさせる

チーズがびろーんと伸びて苦戦してるようだ・・・可愛い

俺とイズルさんは黙々とピザを食べて代金を払いゲートポートに向かった。

ラフェールさんにもらった偽造パスポートは怪しまれることなく通れた。

どうやら旧世界への転送までまだ時間があるようだ。
ゲートポートのロビーで時間を潰すことにする。

「旧世界かあ、話で聞いたことがあるけどどんな所なんだろう
イズルさんは行ったことありますか？」

「ないな、俺も初めてだ」

イズルさんも初めての土地か・・・本当にどんな所なんだろう、楽し
みだな

あつ、いけないいけない！！仕事で行くんだから浮かれちゃダメだ
！！
とりあえずテーブルの椅子に座ることにする。

「今回の仕事は隠密性が必要と思われるがいけそうか？」

「まあ、純粋な剣術だけ使えば・・・音姫を奏でられないのは痛手
ですが」

人間に聞こえない音技は少ないからなあ

「カイトの実力なら大丈夫だろ、問題は・・・」

イズルさんの口が止まる、どうしたのだろうか？
イズルさんの視線の先を見ているとローブを被った少年がこつちを

見ていました。

身長は俺より少し下くらいで白い髪がローブから見える

一瞬セクストウムかと思ったけど違った、どこか似てるな・・・

それからローブの少年はどこかへ歩いて行った。

「イズルさんの知り合いですか？」

「・・・ああ、そんなとこだ」

なのに話ひとつしないんだな・・・仲が悪いのかな？

そこへアナウンスが入る。

旧世界転送の時間がきたようだ、転送エリアの中に移動する。

ローブの少年もいる。彼も旧世界に行くみたいだ

辺りが光に包まれて瞬く間に場所が変わった。

広がる草原にストーンヘンジのようなものがある所・・・

ついに旧世界に来たんだな

一緒に転送された人たちはバラバラに進んでいく

「それじゃあもらった転移魔法符で麻帆良に行きましょうか」

「待てカイト、まだ三日ある飛行機で行くぞ」

「えっ・・・でも今からじゃ飛行機に乗れないんじゃないか」

「別に搭乗券を取る必要はないぞ」

うわぁ、イズルさんの両手で左右の肘を掴んで腕を組む仕草
それをするときは嫌なことが起こる前兆だ・・・

一体何をするつもりなんでしょう・・・

????????????????????
????????????????????

クツ・・・キツキツかった・・・

まさか飛行機の貨物室に忍び込むなんて・・・スペースが少ないよ
無事に日本に着いて予定の20分前に麻帆良の結界の近く来たわけ
だけど・・・

「何か俺たち以外にも結界の外に三人いますね」

「恐らく麻帆良にある魔法書を狙った奴らじゃないのか？」

「でも誰も侵入しませんね、結界のこと知ってるんでしょうか？」

そう言ったらイズルさんが額に右手を当ててラフェールと小さく呟

きました。

ラフェールさんがどうかしたんでしょうか？

「カイト、予定を変更する。侵入者に手を貸して騒ぎを広げ
その間にアズを自由に行動させ情報を収集させる・・・いいな」

「了解です」

さすがはイズルさん、侵入者さえも利用するなんて・・・
この魔法使いは強いから簡単には死なないだろうし

忙しくなるね・・・

そうこう言ってるうちに学園結界が解ける、時間は8時・・・情報
通りだ

「カイト、面を付けろ、顔を見られないようにな」

「はい」

「義」と書かれた面を付け意識を研ぎ澄まさせる。

「それじゃ、行くぞ!!」

盗賊服を着た仮面の二人の男が麻帆良の地へと足を踏み入れる。
今回の俺たちはただの盗賊、麻帆良の情報・・・盗ませてもらいます

第五話

いざ、旧世界麻帆良（後書き）

さあ、次からは戦闘です。

戦闘描写は難しいんですね、

もちろんカイト側がメインです。

第六話

剣士の戦い（前書き）

・・・言葉が少ない

このままだと吸血鬼編が長引く

しかも戦闘ばかりに・・・後二話ぐらいでなんとかしたい

それじゃあどうぞ

p・s

情報屋始めました。

第六話

剣士の戦い

カイト said

麻帆良の結界の中に侵入して気配を消して進んでいく。
他の人たちも動き出したみたいだね、気配を感じる。

「俺は西側の二つに手を貸す、カイトは東側の奴を頼んだ」

イズルさんはそう告げると進行方向を変えて行ってしまった。

「俺も向かうか、アズちゃんも頑張ってね」

「クフユ〜〜〜」

おっといつもと鳴き声が違う、やる気が出てるのかな
素早い身のこなしで学園内を走って行った。
あれほどの動きができるなら大丈夫だろう

気付かれないように向こうにいる侵入者が見える場所に移動する。
どうやらもう学園側に見つかっていて森の中で戦闘が始まっていた。
ここの警備は確かにそこそこ優秀みたいだね。

侵入者の女の人と学園側の二人の男が戦っているんだけど・・・

「侵入者の方が押してないか？」

俺の方から見えるのは学園側の魔法使いであろう

若い優男風の人とナイフと拳銃を持った褐色肌の二人組と黒いローブを着た女の人の侵入者が戦っているのだが

侵入者側の召喚した下級悪魔の大群を相手にしている間に

学園側は術者の詠唱を許し魔法を好き勝手に撃たれている状況だ

侵入者の女の人はどうやら場慣れしているようで落ち着いている。

下級悪魔の召喚は一人で攻める魔法使いにとって前衛となる

必要不可欠であるものだけど・・・

術者の力量のせいなのか俺の知っている下級悪魔のどれよりも強い

これはもう学園側に勝ち目はないかなあ・・・

イズルさんが手を貸してやれって言うから来てみたのに

なんか裏切られた気分・・・

どうしよっかな、別の場所で俺一人が騒ぎを起こしてもいいんだけどしばらく観戦しておこう、侵入者の発見が早かった

きっと学園結界が停止するのからいつもより・・・と言うか

学園の魔法使いが全員で警備に当たっていてもおかしくない

ん？・・・いま遠くの方で何か光ったな

イズルさんの向かった方向とはまったく違う所だな

・・・おかしいな学園結界が停止する前に外側にいたのは

俺とイズルさんを合わせて五人だったはずだけど、まだ他にいたの

かな？

でもあんなに大きな魔力を感じないわけなのに・・・

・・・もしかして始めから学園結界の中にいたとか

そんなわけないか、もしそうだとすれば学園結界の意味ないしね
学園都市の方向を覚えてたの千里眼で覗いてみる。

建物の造りは師範に聞いたのと全然違うな、飛行機に乗る前の街並みに近い

ここは師範の故郷とは違っているようだ・・・

にしても、まだ8時を過ぎたばかりだって言うのに誰一人見えないな
それに明かりが一つも光ってないし・・・麻帆良ってそうゆうところなのかな
アズちゃん迷ったりしてないといいけど

おっと、色々してるうちに戦いに変化が出てきてた

学園の魔法使い二人組が急激に押され始めた。もう時間の問題か・・・

いや、離れた所からこの戦闘に近づいて来る気配が二つ・・・
増援か、これは勝敗が分からなくなってきたな

刹那 said

私は同じ神鳴流を受け継いだ刀子さんと学園の警備に当たっていた。今日は学園の魔法使い全員が警備に出された。

何故今日に限って厳重な警備体制をとったのか分からなかったが木乃香お嬢様をお守りすることが私の使命・・・

お嬢様の危険となる存在はこの剣で斬る

学園が停電して数分すると刀子さんに念話が入ったようで額に念話するためのお札を当てていた。

「刹那、ガンドルフィーニ先生たちから応援の要請が来ました。直ちに現場に急行します。」

「分かりました刀子さん」

別の所で警備に当たっていた魔法先生たちが侵入者を発見して戦闘に入ったらしいが、相手が強くて苦戦しているそうだ。

急いで魔法先生たちの応援に向かった。

私たちが着いた時にはもう完全に押されていて一方的な戦いだった。

たくさんの下級悪魔たちが魔法先生たちを圧倒している。

このままいけば負けてしまう戦況だ。

「刹那、行きますよ」

「はい」

刀子さんと同時に下級悪魔の群れの中に飛び込む

「神鳴流奥義・百裂桜花斬！！」

私と刀子さんの周りにいた悪魔たちは煙となって消える。

今ので召喚されていた悪魔たちの半分は片付いた。

神鳴流は魔を斬るための退魔の剣、こういった悪魔相手には打ってつけた。

「ガンドルフィーニ先生、瀬流彦先生大丈夫ですか？」

「ああ、なんとか・・・」

「応援かつたよ」

あらかた悪魔を排除して先生たちのもとに近寄る
身体の至る所から血が流れていたが致命傷は避けていた。

「増援・・・少し厄介になったわね・・・」

侵入者の方を見ると二つの大きな魔法陣が地面に描かれていて
新たに悪魔を召喚した。

しかも、召喚されたのはさっきのような下級悪魔ではなく

少なく見積もっても5mを越え、武装して鉄球を持った大型の悪魔だ

そしてまた、大量の下級悪魔の召喚を始める

どうやらあのでかぶつ二体が奴の切り札のようだ。

その悪魔が腕を振り上げ巨大な鉄球を私たちめがけて投げてきた。

私は後ろに飛んでそれをかわす、鉄球が地面に当たると
その衝撃と砂煙が襲ってくる。

砂煙が晴れた先に見たものは巨大なクレーターだった。
刀子さんと魔法先生たちもうまくかわして無事だった。

けどあれ程の攻撃をともに喰らったらすすがに危険だ
長期戦になるとこっちの方が不利になる・・・

これは刀子さんたちも分かり切っていることだろう

刀子さんの方を向くと私をじっと見ていた。その意味は直感的に分かった。

短期決戦・・・できるだけ早く勝負を決めることを訴えていると

私も刀子さんの方をじっと見て、首を一回縦に振る。

そして相手の方を向いて剣（夕凧）を握る手に力を入れる・・・

二体の悪魔が同時に鉄球を投げてきた、今度は後ろにではなく

前にかわしてそのまま悪魔の群れに飛び込む、

前衛で私と刀子さんが悪魔たちを相手して後衛で魔法先生方がサポ

ートや

侵入者にこれ以上悪魔を召喚させないように魔法で攻撃している。

魔法先生たちが倒される前に駆けつけることができて良かった・・・
私と刀子さんだけでは悪魔と相性が良かったとしても苦戦していた
に違いない
徐々に悪魔の数も減っていき残るはでかぶつ二体と術者だけとなった。

また大きな悪魔は鉄球を投げってくる、しかしこの悪魔の攻撃パターンは

鉄球を振り回すか投げつけるしかないことが分かり

刀子さんと同時に向かってくる鉄球を飛び越えるようにかわす
もう一体の悪魔が鉄球を投げてきたが私が斬岩剣で縦に真っ二つに
する

そして

「神鳴流奥義・雷鳴剣！！！」

刀子さんの放った雷鳴剣が二体の悪魔に命中して消滅させる
雷鳴剣の影響で辺りがわずかに焦げて少し焦げくさい・・・
悪魔をすべて還したことににより敵は術者一人のみとなった。

これですでに四対一・・・どう考えても私たちの方が完全有利だ

侵入者はもう魔力も大半を使い切り攻撃する力など残ってはいない
だろう

後衛にいた魔法先生・・・ガンドルフィーニ先生と瀬流彦先生が
侵入者に近づいてガンドルフィーニ先生がこう言った

これ以上無駄な抵抗をやめて大人しく拘束されてくれないか・・・と
さらには抵抗するなら容赦はしないと脅しをかけて

これに侵入者はさすがに逆らうことはできず大人しく従った
それを見ていた私と刀子さんは剣を鞘に納めた。

ここで集中を解いてしまったのがいけなかった。

次の瞬間侵入者を拘束しようとしたガンドルフィーニ先生と
瀬流彦先生の後ろにゆらりと現れた一人の影の行動を許してしまっ
たから・・・

「水月流奥義・渦柱^{うずはしら}」

二人は不意を突かれ天に伸びるような渦巻く水柱の中に閉じ込められた。

森の中に月の光が差し込んで新たに現れた敵の姿を照らす・・・
そこで見たのは盗賊の服を着て可笑しな剣を持って義と書かれた仮面を付けた奴だった

「初めまして、この戦いから勝利の二文字を盗みに来ました。」

私は剣を再び抜いて盗賊服の侵入者に攻撃体勢をとった
こいつの目的はなんだ、お嬢様が関わるようであるなら・・・

カイト said

隙を突いて後衛にいた魔法使いを行動不能にすることに成功、
今は渦柱が消えて地面に倒れている。

そして今目の前に残った二人の女の人が師範に聞いた

京を護り、魔を討つために組織された掛け値なしの力をもつ戦闘集団

神 鳴 流

話では聞いていたけど、凄まじい剣技だったな
特に大型の悪魔を倒した時の雷とか凄い威力だったし・・・

「貴方は何者ですか・・・」

「・・・見ての通りただの盗賊ですけど？」

背の高い方が殺気を飛ばしながら俺を睨めつけてくる。

もういつ攻撃してきてもおかしくない状況です

だけど向こうはさっきの戦闘で力を少なからず消耗してるから俺が有利

それでも二対一って言うのもなかなか不利な状況下なわけだけど

「はあああああああ！！！！」

「刹那っ！！」

しばらく睨み合いの硬直状態が続いた後、早く倒そうと焦ったのか左側の髪を束ねている刹那と呼ばれた神鳴流剣士が一直線に向かってきた

もう一人の方もそれに気付いて遅れて向かってくる。

「奏でろ、音姫」

同時に音撃剣・忍音を響かせる。演奏呪文はコントロール次第で一つの楽器で複数の音を鳴らすことができるらしいがそれにはさらに高度な

魔力制御が必要になる、魔力制御には自信があったはずなんですけどまだ二つしか同時に奏でることができないんですね・・・

まあ演奏呪文だけでも難しいらしいし、独学だからね音楽用語とか知らないし・・・

音を二つ鳴らせるから俺の剣技にも応用できる・・・つまり

「音撃剣・破音!!」

俺の剣技、演奏呪文の音を合わせて二つ同時に使うことができる!!

水月流は別で使用可能

「くああああああ!!」

「まだ終わらない、水月流・月食!!」

破音の衝撃波で弾き飛ばした神鳴流剣士との距離を瞬動で一気に詰めて

両手持ちにした音姫で追撃をする。

だけど追撃はもう一人の神鳴流に止められてしまった。

刹那と言う神鳴流剣士はそのまま飛ばされて木にぶつかった。

「貴女が先に・・・相手してくれるんですか・・・」

「貴方のその剣術・・・どこかで聞いたことが・・・」

「へえ・・・」

向こうの神鳴流剣士は少し強く頭を打ったのか動かない・・・
それでもすぐ意識は戻るだろう、その前にこっちの人を
師範の代が最後だったから・・・20年前にはもうなかったはず
この人は聞いたことはあるみたいだけど特徴はまったく知らないみたいだね

・・・だって

俺の剣撃を回避することなくすべて剣で受け流しているんだからね
!!!!

水月流・月食で剣に流れる気を削り取っていく、
そして相手に攻撃が当たる隙ができた時……ここ！

「水月流奥義・残月」

音姫の刃が相手の頬をかする、この攻撃はそこまで力を削らない
けど多く力を削る刃がまだ残されている……音姫がかすったそ
の頬に

その後の高速の剣のぶつかり合いは月食で攻撃を防御して
隙あれば残月で攻撃を当てる。

首、右足、腹などにも残月の傷を付ける……けど全部浅いな
それでも攻撃が多く当たっているからいいけど

むっ……少し身体の気の異常な減少に気付き始めてきているな
剣が防御の方にまわりかけている……これ以上残月は当たっても
らえそうになさそうだ

「うつ……うつ……」

気を失っていた神鳴流剣士の意識が戻ったようだ
そろそろ決めないと疲れそうだな……よし、決めよう
相手の剣を押しきるようにして突き飛ばす
魔法世界を走って身に着いたこの脚力だからこそできる力押し！！

そして忍音の蓄積が済むときがやってきた！！

（ブシャッ）いま俺の耳に確かに聞こえた、相手の気が流れる経路が傷つく音が

顔は異変のことをうまく隠しているけど無駄だね

仮面の裏でニーツと笑みがこぼれる

「それじゃあこれで最後にしますね」

「くっ……」

自分の気に異変を感じたから俺の言葉に直感的に負けると悟ったのか
屈辱したような顔を見せた。

「さあ、残月の二撃目を喰らってもらおう」

音姫を裏手持ちにして地面に刺した

「あっ……あああああああああ！！！！！！」

残月で傷を付けた跡がパア……と光り出して

相手の気を身体の外へと勢いよく放出して抜いていく

そして一人の神鳴流剣士は気が無くなりその場に倒れた。光も消える。

「あついけない、一剣士として名乗るの忘れてた！！……いや向こうも名乗ってないから大丈夫か？いやそれ以前に俺は盗賊だから別にいいのか？」

「あ．．．ああ．．．」

向こうで刹那と言う神鳴流剣士の顔が青ざめている

「刀子さああああああん！！！！！！」

．．．．．つるさい

第六話

剣士の戦い（後書き）

ラフェールの情報提供

どうも、ラフェールだ

本編で情報屋をやっていることから適任とされた

本日はアズの方から情報が送られきている、カイト君の技について
だな

早速自分が読みあげる

まず「音撃剣・破音」

これは二話で登場し初めて書かれた音撃剣だ

カイト君以外に音姫の半径約10m内にあるものに

衝撃波をぶつけて相手を吹き飛ばす技だ

えーカイト君は自分でコントロールしてその衝撃波の威力を高め
前方に放つことができるらしいぞ

次は「水月流奥義・渦柱」

半径約5mの渦を巻く水柱を下から出し捕らえ魔力（気）を削る技だ

これは「水月流奥義・津波」よりかなり範囲が狭いが

その分削る量が多い、渦の回転も加わっていることから

その削る量はかなりのものなのだろうな

本日最後の情報提供だな「水月流奥義・残月」

剣撃を当てると同時に自分の魔力を傷跡に残して

自分が発動させたいときは剣に衝撃を軽く与えたらいいらしい
傷跡に残った魔力が体内の魔力を外へ引っ張り出すようだ

魔力が外に出されると空気中に散歩し傷が光ったように見えるそうだが、カイト君はこの光を気に入っているらしいぞ

ああ終わった・・・

莓のショートケーキが食べたくなってきたな・・・買いに行くか

第七話

ライバルは長年の熟練者？（前書き）

うーん、少し強引にやってしまったか・・・
それじゃ、どうぞ

第七話

ライバルは長年の熟練者？

刹那 said

意識が戻ったとき私が目にしたものは剣のかすり傷であろう所から光を放ち悲鳴をあげる刀子さんの姿だった。
やがて倒れて動かなくなり光が消える、まるで刀子さんの命が消えたように見えた。

まさか・・・殺された・・・

私の頭に死と言う単語が何度も繰り返される

いとも簡単に気絶させられてしまった自分が
情けなくて・・・申し訳なくて・・・頭が真っ白になって
気がつけば叫んでいた。

そして倒れた刀子さんの近くに立っている盗賊を睨めつける・・・

こいつが刀子さんを！！！！

「貴様ツ！！よくも刀子さんを！！！！」

「声下げて・・・うるさいよ」

「黙れ！！！！」

側に落ちている夕風を拾って奴に斬りかかる・・・しかし

「音撃剣・破音」

「くあああああっ！！！！」

またも吹き飛ばされる、今度は夕風を地面に刺して止まる。
もう一度斬りかかるが同じように吹き飛ばされる
これじゃ近づくことさえできない・・・

「・・・弱いですね」

「なんだと！！」

「貴女は弱い、さっきの神鳴流剣士・・・刀子さんでしたっけ？
あの人と比べてかなりね・・・」

「貴様が刀子さんの名前を言うんじゃない！！！！」

私はまた奴に斬りかかる。すると向こうは大きなため息をついた
仮面を付けていてもその裏で呆れているのがよくわかった。
奴は防御の構えをとった。

舐められているのかさっきの技を使ってくる様子はない・・・
より一層奴に苛立ちを感じる。

私の攻撃は奴の剣になんなく受け流される、神鳴流の奥義もだ
それでも私は攻撃の手を休めなかった。ただひたすらに剣を振る。

「ダメだね、感情に任せて剣を振っちゃ・・・力も入りすぎてる」

「盗賊なんかには剣を指導される覚えはない!!!」

「感情の乱れは気の乱れ・・・使われている剣が可哀想・・・その剣は何のためにあるの？」

話す余裕を見せつけながら奴は私に聞いた。だした。

「何のためにあるだと・・・この剣はある方をお守りするためにある!!!」

夕風を両手で持ち振り落とす・・・が

奴の片手で持った剣で止められてしまう

押してもビクともしない・・・その細い腕のどこにそんな力が

「大切な人を守る剣・・・素晴らしい答えですね、でも」

その瞬間、剣が押し返されて夕風が手から離れて宙を舞い、私は無防備になってしまう

「貴女の剣は人を守るには軽すぎる」

次の瞬間、私は奴の剣に斬られ意識を失った・・・

カイト said

水月流・月食を受けて目の前の神鳴流剣士が意識を失った
この人、気の乱れが酷かったな・・・冷静になって戦えば何とか
勝負になったかもしれないけど

そう言えば侵入者の女の人がいなくなってる、逃げたのかな
この近くにはもう他に気配を感じないな・・・学園結界が戻るまで
約二時間ある

イズルさんの方を手伝いに行くのも良さそうだけど
学園の街の方に行ってみようか・・・

うーん、騒ぎを起ければ良いんだよね・・・
やったこと無いけど下級悪魔を召喚してみようか

一応召喚の巻物（盗品）あるしね

血を垂らすだけで下級悪魔を召喚できる契約が要らない簡単なものだ
その分悪魔たちは言うことを聞いてくれなくて暴れるだけらしいけど
巻物の術式に血を垂らすと十数体の悪魔が召喚された
どっかに走りだしたり木をなぎ倒したりと出てくるなり好き勝手し
ている

これで学園側は忙しくなるかな。その時、巨大な魔力を遠く感じた
恐らく大呪文を放ったんだろうけど・・・どんな人だろ
その魔力に反応したのか悪魔たちがその方向に走り出した。

知能の低い悪魔ってこうゆうものなんだ・・・
案外使い物にならないんだな、もう少し使えそなの見つけとこ
木の上に立ち千里眼で巨大な魔力がある方角を見てみると
小さな男の子と女の人の二人組が戦っていた。
面白そうだとあの戦いを追おうと悪魔たちと同じ道を通って行く

けど・・・

「これは・・・いつたい？」

目に入っただのは先ほど召喚した悪魔全体が山のように積まれていて
みんな煙をだして還っていくいく所だった

「ケケケ・・・才前ガコイツヲ召喚シタ奴ダナ」

「・・・人形？」

しかしただの人形ではなかった、身体は小さいが
その身長の数ある凶器（剣）を持つ人形だった。

「ソウダゼ、ツマンネエ奴ラダッタガ・・・」

人形はその凶器を振りかぶり一瞬で俺の上を取った、速い！！
ガキイイイイイイン！！！！

そして重い・・・

刃物がぶつかり合う高い音が森の中に響く

「才前ハ楽シマセテクレルヨナ？」

「何で・・・さー！！」

「オット、ヤルジャネエカ」

押し合う剣を引いて人形に斬りかかるが見事にかわされてしまう俺は今のでこの人形がこれまで戦ってきた誰よりも強いと悟った。剣の衝撃のときの手の握り、乱れの無い魔力コントロール身のこなし、熟練者の一言で済むレベルじゃない

俺の力で勝てるだろうか・・・

時間も限られてるのに、まずいことになったなあ

イズル said

「ふっ・・・終わったな」

俺の前方800mには意識は保っているが指の先ひとつ動かせない学園の警備の奴が十人倒れている。

その中にいた狙撃主は中々の腕前だったな、そいつのみが俺の位置を見つけ出し反撃して見せたのだからな

まあ銃弾はかわしたが、不意打ちを仕掛けて反撃されたのは初めてだったな・・・少し興味が出て

そいつの顔を見てみたくなった。

大きくジャンプしてそいつの近くに着地する。

「なんだ、女だったのか」

目の前には学生服を着た黒い長髪の女が仰向けに倒れている。

女が俺を捉えたとはにわに信じがたいが手には狙撃銃が握られているから間違いはないだろう

「お前の狙撃、中々の腕前だった。女のくせにやるな」

「・・・・・・・・・・」

「そっぴや身体中麻痺で喋れないのか・・・ホント、この力は嫌いだな」

女は鋭い目で俺を睨めつけている。実に反抗的な目だな
こわいこわい・・・

睨み返してやりたいが仮面をつけているから意味無いな
しかし、困ったな・・・名前でも聞いておこうと思ったが
喋れないんじゃないのか？

自分の名前が書いてあるものは・・・

ん？胸ポケットにカードのような物が入っている。

俺はするつと抜き取った。

ただ取る際にこの女の発達した胸に指が触れてしまったわけだが・・・

・

まあ、そんなことを考えている時間はないわけで取ったカードを見る

「これは、パクティオーカード・・・」

表面には子供の女が二つの拳銃を持った絵が描かれてある

恐らくこの女の子の頃の姿なのだろう

そしてその下には名前が書かれてある。

「マナ・アルカナか・・・覚えたぞお前の名前」

俺はマナに背を向けパクティオーカードを放り捨てた。

「俺はイズル、機会があればまた戦おう」

そう言い残し俺はその場を離れた。

それにしても驚いたな、いま遠くの方で戦っている馬鹿でかい魔力の持ち主たちだ

空を飛んでいる所を見たが

一人はラフェールが言ってた英雄の息子だろう・・・

問題はもう一人の方だ、闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

何で魔法世界の賞金首がこんなところにいるんだ

ラフェールの奴、戻ったらしめてやろう

「学園結界起動まで後20分、無駄に戦闘する必要はないし・・・少し早いけど撤退するか」

カイトも結界が起動するまでには戻ってくるだろ

カイト said

「水月流奥義・津波!!」

「ケケケ、アメージ」

人形は高く飛び上がり俺の技を回避する。

そろそろ戦って一時間半が過ぎているが互いに有効打になるものはない

人形だから知らないけどスピードやパワーが落ちていない・・・むしろ上がってる

側面から高速で斬りかかってくるのを音姫で受け止める。

「コンナ長時間戦ッテンノ二動キガ鈍ラネーナnte、テメー人間力？」

「人間だよ・・・ただ毎日1000キロ以上ジョギングしてただけさ」

「何ダソレ？」

それからまた距離を取って

一瞬の気の緩みが命取りになる高速の攻防が始まる。

たく、そっちも可笑しいでしょ・・・

人形の魔力コントロールがここまで完成されてるって

ただ月食で剣にぶつけても全然削れない・・・

忍音は効かないし、氾濫は当たってくれない

でも焦っちゃダメだ、そこには必ず隙が生じてしまう

この人形がそれを見逃すなんてまずあり得ない

だけど、それは向こうも同じみたいだ。

隙はまるでないが、どこか勝負を急いでいるように見えた。

「君、本当に強いね」

「俺二本氣ヲ出サセタ才前モ中々ダゼ」

「けどどこか焦っているようにも見えるけど？」

「ソレハテメーモ同ジダロ」

「あつ、気付いてたんだ」

俺は苦笑しながら距離を置き刺突の構えを取った。
学園結界が戻るまで約十分・・・これを倒さなきゃ易々と
帰してくれなさそうだし

これで決めなきゃ間に合いそうにない・・・

「時間ないから決めさせてもらっよ」

「出来ルモノナラヤツテミナ」

「いくよ・・・、音撃剣・破音・破砕一突！！」

地面をへこむほど蹴り飛ばし相手に向かって一直線に走りだす。
人形は新たに取りだした凶器をいくつか放り投げて来たが俺の2m
先で弾かれる。

破音を常に発動させながら突進してるから物理的攻撃は防げる

相手が自分の攻撃範囲に入ったら破音を剣先一点に集中させ、
喉元を狙って突き出した・・・

が、惜しくも回避され腕の部分をかすめるだけで終わってしまっ

「イイ技ダガ、攻撃ガ隙ダラケダゼツ」

「グッ・・・」

横に振られた剣が俺の腹を深く斬り裂いた

ブシャツと腹から血が噴き出す。

ふらり後ろに倒れそうになるが、堪えて手に力を込める・・・

「俺はこんな所で負けるわけには・・・いかない!!」

攻撃後で身動きができない人形に音姫を振り落とし斬りつけた。
人形の武器を持つ右腕が壊れて少し離れた所に落ちる。

「・・・根性アルジャーネーカ」

「はは・・・まあね」

これからまた死闘が続くかと思われたそのとき、

街の明かりが点くと同時に学園に結界が張り巡らされていった。

・・・えっ？

予定の時間よりも早いんだけど・・・どうして？

ガシャン・・・

機会が崩れる音がして見てみると、さっきまで戦っていた人形が

力なく倒れていた。

「・・・えーと、くたばったの？」

「チゲーヨ、学園結界が戻ッテ御主人カラノ魔力供給が切レタンダ・
・・・」

なんかよく分からないけど、とにかく魔力が切れて
動けなくなっちゃったってことかな？良かった・・・
けど困ったな、この傷じゃ撤退するのは危ないな
結界の外に出たら追手が来るだろうし・・・

「オイ、才前チヨット俺ヲ家マデ運べ」

「何で俺がそんなこと・・・」

何で上から言ってくるかな・・・動けないのに

「・・・イイ隠レ場所アルンダガヨ」

「気分が変わった・・・運ぶよ」

何か心の中を覗かれたような気がするけど・・・まあいつか
ひょいっと持ち上げて抱きかかえる。

・・・本当に動かないんだよね？

「ああ・・・君、名前とかあるの？」

「チャチャゼロ、テメーモ名乗りナ」

「俺はカイトって言うんだ」

「ソウカ、ソレヨリマタ殺シ合オウゼ」

「いや、できればしばらく戦いたくないな・・・」

こうゆう力が互角の相手の事を好敵手^{ライバル}って言うのかな・・・
漆黒の森の中を歩きながらそんなことをふと思った。

第七話

ライバルは長年の熟練者？（後書き）

ラフェールの情報提供

ラフェールだ、またアズから情報が届いた。

カイト君の技、音撃剣・破音・破音・破砕一突だが
これは音撃剣・破音の応用で

敵に接近するまでは周囲に破音を発動させ物理防御の役割をし
攻撃に転じるときは一点に集中させ破壊力を上げる。

測定したとこ、この一撃は鉄を粉末状にしてしまう威力らしいぞ

今回、チャチャゼロと言う相手がカイト君を苦しめたみたいだな
世界にはこのような強者がたくさんいるのだ

カイト君にはさらに強くなってもらいたいものだ

次の話はしばらくほのぼのいきそうな予感がする

第八話

束の間の平穩（前書き）

もう一話麻帆良で書く予定でいたが・・・
京都に早く行きたくてな

では、どうぞ

第八話

束の間の平穩

カイト said

「と言っことなんで学園の外に出られなくなりました。」

「何が、と言っことなんでだ」

「いやいや仕方なかったんですよ」

えー俺は今チャチャゼロに案内された森の中のログハウスのさらき中にある

ダイオラマ魔法球の中にいます。

見たのも入ったのも初めてだけどスゴいね

何か南国の島にお城が建っているような所だよ

それに外での一時間がこの中では一日なんだって、便利だよね
なのに今では使われてなくて物置にしまってたんだって勿体ない

で、学園の念話機でイズルさんと連絡を取っているわけ
普通の念話は学園結界に妨害されてできなかったからね

「俺からもどうすることもできないからな、とりあえずアズを魔法
世界まで返しに行ってくるな」

「はい、分かりました。こっちはこっちで何とかしてみます。」

どうやらアズちゃんも学園結界に戻る前に外に出てみたい

でもアズちゃん一人じゃゲートポートを通れないから
向こうまではイズルさんがついていくようだ

「できる限り早く戻って来るからな」

「心配しなくても大丈夫ですよ、アズちゃんの方お願いしますね、
それじゃ」

ブツツと念話を切って受話器を戻す。

「オーオー、難シイ話八済ンダカ？」

「まあね」

テクテクとチャチャゼロがやって来た。

このダイオラマ魔法球の中なら動けるくらいにはなるらしい

「てかさ、もう一週間・・・外では七時間経ったわけだからチャチャゼロがいなくて心配されるんじゃない？」

「イーンドヨ、動ケネーカラホツタラカシニサレタンダ、大丈夫
ダロ」

「なら良いけどさ」

まあここは食料もたくさんあるし修行できるし生活に
困らないけどさ・・・けどさ・・・

「やっぱり同じところをぐるぐる走るなんてつまらない!!」

「テメーハ走りノ馬鹿ナノカ？」

義賊で行動してた時は数キロ走れば景色が度々変わって楽しいのにこれじゃトラックを無限に走り続けてるようなものだよ
・・・傷も癒えたのに・・・

「マー御主人モモウスグ学校二行クカラ我慢シナ」

チャチャゼロの御主人・・・つまりマスターのことだが
何と魔法世界で知らない人がいないほど有名な闇の福音の二つ名を持つ

エヴァンジェリン本人らしい、ただ今は登校地獄って言う呪いをかけられて満月の夜以外の身体能力は一般人と変わらないんだって

「はぁ、仕方ないか・・・それまで未完成の技を完成させるか」

ああ、走りたいなあ

刹那 said

私が目覚めたとき、そこは学校の保健室だった。

そうか・・・私はあの仮面の盗賊に負けて・・・はっ刀子さん！！
ガバツと起き上がると直ぐ隣のベッドで寝ている刀子さんがいた。
それを見ると安心して肩の力が抜けた。

「やあ、起きたか刹那」

「龍宮か・・・」

同じ仕事仲間でルームメイトの龍宮も別のベッドに横たわっていた。
ゆっくり、異常なまでゆっくりと身体を起き上がらせてみせるが・
・

「どうした？動きがぎこちないぞ」

「敵の神経毒にやられてしまっとな・・・この様子」

「毒は解呪してもらわなくていいのか？」

「やってもらったさ・・・けど解呪できたのは一部だけで全部は無
理らしい、後は自然に治るのを待たねばいけないみたいだ」

龍宮がやられるほどの相手か・・・

私も龍宮の実力は十分知っているつもりだ

その龍宮が勝てない奴が攻めてくるとは・・・運が悪かったとしか
言えないな

高畑先生も海外に行っておられて不在だったからな

「確か仮面を付けた盗賊服の男だったよ」

「何っ 龍宮もか!!」

「刹那も戦ったのか・・・だがそれは私と別の相手だな場所が離れている」

奴のことを思い出すとどこかイライラする・・・

奴は私を弱いと決めつけたどころか、私の剣を指摘してきたんだぞ
大体なんだ奴の剣は!!

刀身に線がたくさん引かれてあったり、穴が空いてあったり・・・
奴こそ剣をファッションか何かと勘違いしてるんじゃないか

「私はアイツを許さない・・・」

「奴らの実力は相当なものと間違いないようだな」

・・・確かにそうだ刀子さんから一太刀も喰らわずに圧倒するほどの
力を持っていた。そして私はいとも簡単に・・・

いや、こんなことを考えていても仕方ない。

とにかく私は今よりもずっと強くならなければいけない!!

お嬢様を守るためにも・・・

学園長 said

「以上が昨日の警備で負傷した者たちの状態です。」

「うむ、ご苦労じゃった。下がってよいぞ」

「はっ」

警備の者の状態を報告しにきたシャークティ君が学園長室から退室する。

しかしのう……

「学園の警備がここまで被害を受けるとは思わなかったわい」

魔力が欠落しておった者が四名、重度の神経毒を受けた者が十名……
学園ができてからこれまでの被害を受けたのは初めてじゃ……

「しかしこの毒……本人の魔力に浸透してしまうとは厄介じゃのう」

お陰で二、三日はともに動けそうになさそうみたいじゃい
龍宮君、刹那君、刀子君が見たと言う仮面を付けた盗賊服の輩……
以前、高畑君がメガロで戦ったと言っておったな
上の者は彼らの行動を世間から隠しておるようじゃの
今はまだ噂で済んでおるがいつ世間に知られることやら……

コンコンツと学園長室のドアを叩く音がした。

「学園長先生、ネギ・スプリングフィールドです。」

「うむ、入ってよいぞ」

おつといかん、すっかりネギ君を呼び出しておったのを忘れとったわい

ドアを開けて十歳の少年、ネギ・スプリングフィールド君が入る。

「何か用件ですか？」

「実はじゃのネギ君、3・Aの修学旅行の京都行きを中止せねばいかんかもしれなくてのう」

「え……し、修学旅行の京都行きは中止……!?」

京都行きの中止にかなりショックを受けたらしく
ふらふらと壁まで行き、もたれて落ち込んでしまった

「コレコレ、まだ中止とは決まっとらん、ただ先方がかなりイヤがつておつてのう」

「先方？京都の市役所とかですか？」

「いや、関西呪術協会、それが先方の名前じゃな」

その後ネギ君にワシが理事を務める関東魔法協会と関西呪術協会が仲が悪いことや、向こうが京都入りに難色を示した理由の

魔法使いが一人・・・つまりネギ君がおることが理由だと教える。

「それじゃあ僕のせいで・・・」

「まあ落ち着くんじゃ、ワシとしても西とは仲良くしたい、そこでネギ君には特使としてこの親書を向こうの長に渡してきてほしいのじゃ頼めるかの」

「わかりました。任せてください学園長先生」

「そうかそうか、道中敵の妨害があるやもしれんから気を付けるのじゃぞ」

フォッフォッ新学期になってからいい顔をするようになったの将来が楽しみじゃわい

しかしこの時、深緑の髪の少年が窓の外でこの話を盗み聞きしていたとは誰も気づくことはなかった・・・

カイト said

うわ~~~~結構色んなこと聞いちゃったよ

チャチャゼロにここの一番偉い人を聞いて張り込んでいたけど案外早くていい情報を聞けちゃったなあ

しゅーがくりよこー？って言うので京都に行くみたいだあのネギって言う巨大な魔力の持ち主も行くみたいだし

学園結界を通過するとき近くにいれば気づかれずに済みそうだ。

早い段階で学園の外に出られるし、京都に行けるし、運がいいなあそれにしてもイズルさんの毒、スゴいな・・・魔力まで影響するっただけで可笑しいな、イズルさんの手持ちにも巻物の中にもそんなもの無かったのに・・・

おつ、さつき校舎から出て行つたネギが何か二人の女の人と話してるな、ちよつと聞き耳を立ててみる。

「あんた何顔赤くしてんのよ？」

「いや・・・え・・・別に」

「なあネギ君、修学旅行の準備にカバンとか買いにいかへん？」

オレンジ髪の女の人、ネギ、黒髪の女の人順に話す。

買い物か・・・そう言えば俺、こっちの世界の服無いんだよな今着てる服だつてファンタジー感あるし、

良い機会だし新しい服買っておこうかな、まだ少しの間ここにいるわけだし

向こうは何かカードでキャッキャやってるけど無視無視・・・さつさと行こう

「おお・・・ここが買い物場か人でいっぱいだ」

魔法世界は獣人もいたけど旧世界は人間種だけだな、不思議な光景だ
おっと早く服買わないと、認識障害魔法かけてても
長く使つてればいつかは魔法使いに怪しまれちゃうからな
・・・でも、服つてどれがいいかまったく分らないんだよな
とりあえず気に入ったのをテキトーに買つて終わろうつと
その店から自分がいいと思ったのをいくつか買つて会計に行く
会計の女の人は何やら作業してこっちに気づいていない

「すみません、これ買いたいんですけど」

「あつはい、すみませんお客様、お会計ですね・・・男服?・・・あ
つすみません!」

いま絶対に女の子に間違われてたな・・・すぐに男の子つて気づい
ただけ

しばらく言われなかったから男らしくなったのかと思つただけ
まだまだ女の子みたいに見えるのか・・・シヨックだな
義賊になつてから、たくましくはなつたはずんだけどな・・・
会計が終わり服の入った袋を持ち店を出る。

「一応、服も着替えたしこれからどうしよう・・・」

他に買いたいものなんてあつたっけな・・・
うゝん、思い浮かばないな・・・グウ~~~~
・・・お腹が減つたな、この辺りは飲食店がいっぱいあるし昼食に
しよう

俺は近くにあつたファミレスに入った。
店内は思ったより空いていてすぐ席に座れた。

「あつご注文が決まりましたらお手元のスイッチを押してお呼びください」

「わかりました。」

席まで案内してくれたウェイトレスさんがチラチラこっちを見ながら元の場所に戻って行く。

最初はまだ仕事に慣れてないからかなって思ったけどそれは違つとすぐわかつた。

他のウェイトレスさんも、他のお客さんもこっちを見ていたのだ。ファミレスに十二歳児が一人で来たことが珍しいのだろう

周りからのたくさんの視線が俺に向けられる。

テーブル席に座ってる女学生たちが俺を見てかわいいと小言で言う。これは注目を浴び過ぎてるんじゃないや……恥ずかしい

早く昼食を済ましてしてここから出よう

メニューを開いて食べるものをさっさと決めて手元にあるスイッチを押すと、しばらくしてウェイトレスさんが来る。

俺はトンカツを注文して料理がくるまでまた視線を浴び続ける。こんなに早く料理が来てほしいと思ったのは初めてだ……

トンカツが出来上がって届くと割り箸を割つてすぐ食べ始める。その時、俺はトンカツの上に白い何かが乗っていることに気づいた。メニューを開いて注文したトンカツの所を見してみる。

どうやら大根おろしと言うものらしい、

このトンカツは大根おろしと隣の小さなカップに入ってる

ポン酢をかけて食べるおろしポン酢トンカツと言つものらしい
周りの視線が気になって全然見てなかった・・・

トンカツ一切れにおろしポン酢を少し乗せて食べてみる。

「お・・・美味しい」

言葉に出してしまうほどにそれは美味しかった。

魔法世界でトンカツは一度食べたことがあり味を知っていたが
このおろしポン酢を乗せて食べただけでこんなに違うなんて・・・
箸が・・・止まらないっ

こんなこと、魚の塩焼きを初めて食べた時以来だな

おろしポン酢は塩とはまた違うさっぱりとした感じがあ・・・って・・・
・・・

突如、俺の脳内に雷の如き電流が走った

そうだ・・・塩とおろしポン酢を買いに行こう

そうと決めた俺はトンカツを美味しく味わった後

店を出て塩とポン酢と大根を大量に買い占めた。

ここでも周りの視線が集まったが気になることはなかった。

「あつそろそろ三時か・・・チャチャゼロの御主人が学校から戻る
前にダイオラマ魔法球に入らないとヤバいんだっとな・・・」

でも、あそこに戻ると長い時間あの城の中でいなきゃならないんだ

よね

走ってもつまらないしな、次ときには安全寝れる人気の無い所捜しとこう

戻ったらチャチャゼロに魔力コントロールの指導してもらお

今日買った服と調味料と大根を持って鼻歌を歌いながら俺は帰った。

第八話

束の間の平穩（後書き）

情報屋ラフェール

おう、ラフェールだ

今回の話はカイト君のショッピングがメインだったな

カイト君は食べ盛りの年頃なのか食に興味があるようだな
因みにカイト君は抹茶つつのをいただいてみたいらしい
いったいどのような物なのだろうな・・・

次から京都だな

第九話

京都きました、観光です（前書き）

原作に描いてあるとこ書くのって

書いても読んでも複雑な気持ちになる（俺は）

次話からなるべく書かないようにしよう

第九話

京都きました、観光です

カイト said

「ふあゝあふっ・・・ついに来たか」

窓から朝日の光が差し込むコンクリートの部屋でまた一日を迎えた。
ここは使われなくなった校舎の中だ。

人目は届かないし、静かで気持ち良く眠れたよ
で、今日は待ち望んだ修学旅行当日・・・

この麻帆良学園から外に出ることができるんだ。

起き上がって背伸びを一回した後

一般人に紛れ込むため服装を整え、音姫は巻物に収納して
修学旅行の集合場所の新幹線の駅に向かった。

駅に着いたとき時刻は九時前位だった。

駅のホームには同じ学生服を着た女子の集団があった。

その前に教職員のような人たちもいて、その中にネギがいた。

「立派な魔法使いになるための修行・・・教師やることなんだ」

心の底で無理があるだろ・・・と思いつつ学生と一緒に新幹線に乗
車した。

俺は景色を眺めることができる窓側の席に座る。

この車両には一般人しかいない。

隣の席は空いていて広々使えてかなり寛げる空間になっている。

「しかし、ネギの他にも魔力や気を使える人材がこうも乗っているなんて・・・」

3-A・・・恐らくネギが受け持っているクラスなんだろうけど

そのクラスだけに気を発する人が結構いたんだよね

この前対峙した神鳴流剣士の刹那もいたし

でもこれは嬉しい誤算だね

これだけ気を発する人がいれば俺の存在がバレる心配はないだろう。

出発のアナウンスが入って窓の景色が流れるように動いていく・・・
spの景色の流れは次第に速くなっていった数分も経ったときには
学園結界を通過していた。

予定通りに脱出することができ京都に着くまでひと眠りしようと思
った時

学生のいる車両の方からあの神鳴流剣士が歩いてきた。

まああの時素顔を見られなかったからこっちに気づくことなく
通り過ぎて行った。

「あゝ驚いた・・・何しに行ったんだろう？」

「キャーキャーヒューッ！！！」

刹那の歩いて行った方向と逆の学生たちのいる車両から悲鳴がした。
ひとつ車両を挟んでいるのに、なんて大きな悲鳴だ・・・
うるさいなと思ったとき、手紙をくわえた鳥がこの車両に入ってきた。

それに続いて・・・

「コラー！親書を返してくださいー！！！」

この車両にいる人のことを忘れ大きな声を出して
ネギ・スプリングフィールドが現れた。

非常に迷惑だ……

しかも肩に乗ってるオコジヨ妖精も平気でしゃべってるし
人が少なくて助かったね……

俺は魔法の秘匿とかどうでもいいんだけどさ

早速、関西呪術協会の妨害を許したりして……大丈夫か？

俺としてはこの騒動に最中に関西呪術協会から刀とか盗んでおきた
いんだよね

旧世界の名刀とか結構高い値段で買い取られるからね

久しぶりに義賊として行動できそうだ。

京都に着くまで寝てよ……

刹那 said

ついに京都に来てしまった。

行きの新幹線の中でも、阻止はしたが妨害工作が行われていた
京都駅から清水寺までの道中は何もなかったが

いつまた何をしてくるかわからないから油断できない。

今は清水寺の本堂まで来ている。

ここからの眺めを見るのはいつ以来だろう……

「ここからの景色見るん久しぶりやね・・・」

私の隣に歩きながらこのかお嬢様がやって来る

「そうですね・・・」

「なあせつちゃん、一緒に御守り買わへん？」

「・・・すみません、私は用があるので」

ぺこつとお嬢様に一礼して側を離れる。

お誘いしてくれたことは嬉しいことです

私は陰からお嬢様をお守りできればそれだけで・・・

「せつちゃん・・・」

後ろからお嬢様が呼びかけるが私は振り返らない。

これが私が選んだ道ですから・・・

「このかー！先に行っちゃうよー！！」

「えっあ・・・うん、いま行くなー」

神楽坂さんに呼ばれてお嬢様はそっちの方へ行く。

神楽坂さんはお嬢様と仲の良い関係にある。

学園では新聞配達をして学費を稼いでいる苦勞人だが元気で満ち溢れている人だ

彼女と話すお嬢様も楽しそうで何よりだ・・・

「いいのかい刹那・・・このまま近衛と距離を置いて」

「龍宮か・・・余計なお世話だ」

私とお嬢様のことを心配してか、龍宮が話しかけてきた。

「別にいいんじゃないか、仲良くおしゃべりするくらい」

「私だってできればそうしたいが、やはり身分の差が・・・」

「そうゆう問題かな？」

「・・・お嬢様が音羽の滝に向かった、離れ過ぎるわけにはいかない・・・先に行くぞ」

「・・・心の距離は離れ過ぎている気がするがな」

最後に龍宮が小さな声で何か言ったような気がするがよく聞こえなかった。

聞き直したいところだがお嬢様の元に急ぐべく音羽の滝に向かった。私が音羽の滝に着いたときにクラスメートの一部が酔いつぶれていた。

見たところ滝の上にある樽のお酒で酔ってしまったようだ。

お嬢様は酔われていないようで良かった。

で、ネギ先生はと言っと・・・

「うひゃーん、何でもないです〜!」

・・・何とも情けない対応だ

関西呪術協会の罫に至ってもイタズラをしているのと同じレベルだ・

・

舐められているしか思えない

「仕方ないか・・・」

魔法使いと言ってもまだ子供・・・私がこのかお嬢様を守らなくては運が良いことに酔いつぶれた生徒を旅館に連れていくため

3-Aは全員旅館に行くそうだ。道端にいるより守りやすい

関西呪術協会の奴らにこのかお嬢様を渡しはしない。

カイト said

「京都・・・確かに風情のある良い所・・・」

京都駅から降りた俺は絶賛京都を観光中です。

京都ってスゴいね、金ぴかの建物とか古い建物とかたくさんあってさ魔法世界じゃまずこんなの光景は見られないよね。

ここなら毎日走り込んでも飽きることがなさそうだよ。

そして今、俺は最高に幸せな一時を過ごしている。

「・・・美味しい」

俺の両手には緑色の液体の入った和風のコップのようなものがある
そう、抹茶だ。

修行当時から師範から聞いて以前から飲んでみたかったものだ
何て深く苦味のある味わいなんだ・・・
さつき食べたハツ橋も美味しかったし、師範の故郷は良い所だ。

「早く関西呪術協会と騒動起こしてくれないかな・・・」

師範に陰陽術を習ったから簡単なものならできるから
連絡用の式神を飛ばして様子を見ているけどイタズラ程度でつまら
ないな

それにもう旅館に向かっているし
俺も旅館に行って潜んでおこうかな
そうと決めた俺は駅の方に歩きだした。

駅に着いたとき不思議な現象が起こった。

駅から人が全員離れて行くのだ。

俺が駅の中に入ると呪符をペタペタ貼っている店員姿の女の人がい
た。

「人払いの呪符ですか？」

「！！っ人払いの呪符を・・・あんた何者や!？」

突然現れた俺に驚いて女の人が呪符を出して構えた。

「落ち着いてくださいよ、戦う気はないですから」

「信用できへんな、あんた西洋魔術師と京都に来はったやろ」

「西洋魔術師の仲間かもしれないと・・・冗談やめてくださいよ、寧ろ恨んでるくらいですよ」

「恨んでるやて・・・」

恨んでるの言葉に反応して女の方は警戒心を緩めた。

「俺の故郷は西洋魔術師のせいで無くなりましたから・・・」

「・・・・・・・・・・」

「その時、俺を救ってくれたのが京都で水月流の師範をしてた人で」

「・・・・・・・・水月流やて」

「ご存知で？」

「小さい頃そんな流派があつたよーな・・・」

知らない方が普通なのかな・・・まあとつくの前に忘れられた流派だし

けどこの女の人、少し俺のこと信じ始めてきたかな

「まあ今は盗賊をやっていますが・・・呪符貼るの手伝いしましょうか？」

「・・・それなら、頼むわ」

呪符を半分もらって辺りに貼りつける。

仕掛けをしておくなんて、計画的な犯行が予想されるね。

そう言えばこの人が何をするのか知らないな・・・

まあいいか、今夜何かしれかすみだいだから、こっそり付いてくしかないね

「あんた何笑つとるんや？」

「いや、別に何でもないですよ」

顔の前で両手をひらひらさせてその場をやり過ごす。

高い所にも呪符を貼ろうと浮遊術で浮く、
周りに一般人がいらないから気にしない。

「その歳でそんな高度な術使えるなんて・・・歳誤魔化しとるんとかやうか」

「ええー、それ失礼じゃありません？」

そんな会話を話しつつ呪符貼りを済ませていった。

さあて、今夜が楽しみだな。

アスナ said

「えー！ーっ 私たちが変な関西の魔法団体に狙われてる！？」

「こっ声が大きいですよアスナさん」

酔って「みんなを部屋で休ませた後、ホテルの自販機の近くで座っているネギとカモからまた魔法の厄介事の話が聞かされた。どうりで、あんな力エル変だと思ったのよ

「すみませんアスナさん・・・」

「どーせまた助けて欲しいって言うんでしょ？いいよ、ちょっとなら力貸したげるから」

「ア・・・アスナさん」

「そうだ姐さん、桜咲刹那って奴が敵のスパイらしんだ、何か知らねーか」

「スパイって・・・桜咲さんが？」

桜咲さんかぁ・・・よく知らないけど、そう言えばこのかの昔の幼なじみって

聞いたことがあるけど・・・実際にあの二人がしゃべってるところって

見たことないな・・・

「あっ！そう言えば・・・待って！ー！」

ネギが何か思い出したみたいで自分の荷物の中から出席簿を取り出して開いた。

「あゝっ見て見て!!」

ネギが指差した所には京都神鳴流って字が書かれてあったけどこれって何て読むの? かみなるりゅー?

「やっぱり・・・間違いねえ奴は関西呪術協会の刺客ですぜ」

「ネギ先生ー教員は早めにお風呂を済ませてくださいな」

「あっはい! しずな先生」

もうそんな時間がきちゃったんだ、これ以上は話せなさそうね

「しょうがない、続きは夜の自由時間に聞くからね」

私は自分の犯の部屋に戻ることにした。

そう言えば五班もお風呂の時間ね、パルたちは寝てるだろうからこのかと一緒にっこうつと

自分の部屋の襖を開けて中に入る。

そこにはまだ寝てる本屋ちゃんと夕映ちゃんとパルと起きてるこのかがいた。

「このかーお風呂入りに行かない?」

「お風呂か・・・うん、いくー」

お風呂に行くことが決まった私たちは洗面用具を持ってお風呂場に向かい入口まで来た。

「なあアスナ、今このお風呂場からスゴイ音せーへんかった？」

「えっそう、気のせいじゃない？」

私は特に何も聞こえなかったけど・・・
少し不安になったけど中に入ってみるが可笑しな所はない
着替える所は大丈夫みたいね、安心して私たちは服を脱ぎ始めた。

しかし

「ウキーーーーー！！！」

バスタオルを身体に巻こうとした時、どこからかおサルの集団が現れて
私の身体にひつついてきた。

「キャーーーー何なのよこれーーーー！！！」

「わっ、ひゃーーーーアスナ！！！」

「じっこのかー！！！」

おサルたちがこのかを連れてお風呂の方に逃げて行つてた。

すぐに追いたい所だけとおサルが邪魔で助けにいけない・・・

段々このかが遠くに連れて行かれてる。

その時、左側の方から水しぶきを上げながら高速で

このかに近づいていく人影が見えた。

手には細長い何かを持っていて月の光に反射して輝いて見えた。

その光の輝きがおサルの上まで行くと何が起こったのかわからなかったけど

おサルが紙切れになつて綺麗な桜と一緒に宙を舞っていた。

その中心には左腕でこのかを抱えて、右手に剣を持った桜咲さんの姿があった。

第九話

京都きました、観光です（後書き）

情報屋ラフェール

ラフェールだ

最近展開がなくて情報が提供できないのが悩みだ

どうやら作者は次話かさらに次話で原作路線を回避したいそうだ。

また見ていただけると有り難い

第十話

芽生えた二つの音調（前書き）

えー、私は気づきました。この始めを見ればわかると思う
自分は話の区切り方が下手のようです。

4500文字を目安にして書いてますが

あと2000文字ほど書いた方が一話としてのまとまりが取れるの
か・・・

悩みどころです

第十話

芽生えた二つの音調

カイト said

「ああ、いい湯だな・・・」

俺はホテル嵐山の露天風呂で一人ゆっくり湯船に浸かっていた。もちろん、俺はこのホテルに宿泊していないので無断で利用しているわけだが・・・

結局、千草さんの作戦は神鳴流剣士の刹那によって終わったけど千草さんはお嬢様ゲツトのためにホテルの中に侵入していった。その間、何もなかったのでこうして寛いでいるわけです。

吹き通る風が気持ちいい・・・

ふと視界に入浴後に着替える盗賊服の上に置かれている音姫が見えた。

俺は音姫を手に取り、鞘から抜いて刀身が月の前にくるように持ち上げた。

「ここ最近・・・演奏してないな」

・魔法世界でも旧世界でも忙しかったから全然余裕なかったからな・・・

麻帆良では警備に見つかる可能性があったからできなかったしでも関西呪術協会から色々盗んだら魔法世界に戻る予定だし向こうに戻ったら思いっきり演奏しようか

セクストウムも聴きに来るかもしれないし・・・

「そう言えば、セクストウムとも最近会ってないな・・・」

まあ俺も演奏する機会が少なかったしセクストウムも世界の救済のために頑張っているだろうからかなり忙しいはずだからな・・・

あの時、セクストウムが言ってたな
直接、音姫の演奏を聞くのは初めてだって・・・
そうするとそれまでは間接的に聴いていたってことになるんだけど間接的に聴くってどうゆうことなんだろう？

・・・うん、わからない

けど、何らかの手段で演奏を聴いていたのは間違いない。
音姫に少量の魔力を注ぎ込んで小さく音を奏でてみる・・・
ホテルの中には届かない位の音量で

それでもきつと間接的に、セクストウムに聴こえていることを信じて・・・

気がつけば両親のために奏でていたこの演奏は
いつしかセクストウムのことを思いながら奏でるようになっていた・
・

胸に手を当ててみると鼓動が平常のときよりも速くなっている
初めてメガロに侵入する前の緊張状態に似ているような感覚だか

何か違う・・・・・・・・

胸がドキドキしたり・・・

苦しくなったり・・・

ズキッと痛くなったり・・・

ドクンと高鳴ったり・・・

「もしかして・・・・・・・・」「恋」ってやつなのかな・・・・」

その考えに至ると無性に自分を恥ずかしく思った。

それに湯船に長く浸かり過ぎたのかスゴく顔が火照っている。

重心を後ろに移し、音姫が湯に浸らないようにしながら

仰向けの状態で星を眺めるように自分の身体を湯船に浮かせた。

「恋か・・・経験ないけど・・・これがそうなのか・・・」

もしそうならこの気持ちも納得できるな

そうか、俺・・・セクストウムに恋してるのか・・・

目を閉じればセクストウムの姿が思い浮かんでくる

白い綺麗な髪、白く美しい肌、無機的な瞳、無表情な素顔

また、胸の鼓動が速くなった・・・

目をゆっくり開いて夜空を見る。

いま魔法世界でセクストウムもこの空を見ているのかな・・・

そんなことを考えていると、

ホテルから大きな猿の着ぐるみが現れて空を飛んで行った。

「あれは千草さん・・・お嬢様を手に入れたのか」

湯船から上がって身体の水気を取って

いつもの盗賊服に着替えて腰に音姫を差し義の仮面を付ける。

千草さんより遅れてホテルから飛び出して合流することにする。

千草さんは人払いの呪符を貼ったエリアを通って行くはずだから

その先に先回りして行こう

さて、集中集中っと

まだ京都の街には人がたくさんいるな

認識障害魔法を使って街の上空を飛び回る。

上から見る京都の夜景もまた良いものだな・・・

そうこうしていると着ぐるみを脱いで小猿に誰かを持たしている
千草さんを発見、向こうから三人ほどの気配も近づいてくる。

「また会いましたね、千草さん」

「その声、カイトはんか」

街中の幅が広く長い駅の階段の所で千草さんに合流した。
人払いの呪符の効果で周りに誰もいないな
そして、追手もやって来たようだ。

「おサルが脱げてる!!」

「兄貴、誰か一人増えてるぜ!!」

「ホントだ、また関西呪術協会の人かな」

やって来たのは西洋魔術師のネギとそのパートナーか？
後はオコジヨ妖精一匹に・・・

「貴様ツ・・・関西呪術協会の手先だったのか!？」

「まあ、そんなところかな」

神鳴流剣士の刹那の計三人と一匹つと
人数的にも大したことはなさそうだな
音姫を鞘から抜いて刀身をお嬢様とやらの首元まで持っていく

「この女の人が前に言ってた守る人? ダメじゃん、ちゃんと側にいてあげないと」

「このかお嬢様に触れるな!!」

へえーこの人このかつて名前なんだ。

刹那は鞘に納めていた剣を抜いて剣先をこっちに向けてきた。
俺も剣先を向ける。

しばし睨み合った後、先に動いたのは俺だった。
地を這うように上体を低くして敵一直線に走り出した。
刹那は迎え撃つ構えを取り俺を睨めつけている。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 風精召喚 剣を執る戦友
!!」

ネギが呪文を唱えるとネギの姿をした風の中位精霊が八体現れた。

「迎え撃て!!」

ネギの命令に風の中位精霊が反応して俺に向かって一斉に突撃してきた。

でも、

「遅いよ・・・」

風の中位精霊に飛びかかり一瞬のうちに斬り捨てて消滅させた。飛んだ勢いのままネギに斬りかかる。

「ネギ先生！！」

刹那の剣が俺の斬撃を止めた。
キィィィンと高い音が響いて剣同士が押し合う。

「こんなに早く貴様を倒す機会が来るとはな」

「ハハッ何それ笑えない冗談だね・・・って笑ってた」

「格好も剣もふざけていれば性格もそうらしいな」

「いやいや、服装は至って普通じゃんかわからないかな、この音姫の刀身の美しさはあと俺の性格は言われるほど悪くない」

「神楽坂さん、今のうちにお嬢様を!!」

「うん、行くわよネギ!!」

「はい、アスナさん!!」

アスナと呼ばれた女の人とネギが俺の横を通って千草さんの方に向かって行った。

俺は押し合う剣を引いて前に体勢を崩した刹那を蹴り飛ばした。振り向くと千草さんの10m前まで来ていた

俺から千草さんまでの距離は40mほど・・・

間に合うな、向こうもそこそこ速いみたいだけど今、脚力の圧倒的なレベルの差と言うものを・・・

「え~~~~い」

気の抜けた響きの声と同時に

千草さんとネギとアスナの間に誰かが現れて二人を突き飛ばした。ネギとアスナは階段を転がって下に落ちて行く。

「えーと、誰ですか?」

「神鳴流の月詠つぐよみいます~~~~おはつに~~~~」

「ど、どうも・・・水月流のカイトです」

現れたのはお人形のような服装をした

中と小の長さの二刀の剣を持つ月詠と言う女の人だった。

「遅いで月詠はん」

「すみません道に迷ってしもて・・・」

どうやら千草さんに雇われた神鳴流剣士の人みたいだ。
それにしても地元の人でも迷うんだな・・・京都

「ほな、ウチは神鳴流のセンパイの相手をさせてもらいますえ〜」
「」

「待つてください月詠さん、あの三人は俺がやりますから」

「独り占めはあきまへんえ」

何だか知らないけど月詠さんと戦う相手の取り合いが始まった。
月詠さんは自分も人を斬りたいと言っているが

俺は違いますよ、ただ最近走ってないから
身体を思いっきり動かしたいだけなんです。

魔法世界と違って旧世界は生きにくい世の中だな・・・

「魔法の射手 連弾・光の39矢!!」

話し合いの最中にネギが詠唱して魔法を放ってきた。
尋常じゃない魔力が込められているけど練りがいまひとつだな

「音響剣・崩鈴^{ほうりん}」

音姫から綺麗な鈴の音が響き渡った。

そして鈴の音が鳴る度に接近してくる魔法の射手は小さくなっていた。

そして俺の所に来たときには指先ほどの大きさになっていた。

俺はそれをかわさずに受けるが蚊ほども痛くない。

「そんな・・・僕の魔法が」

何やらネギが啞然としているね。

あの程度の魔力の練りで不意を突いて攻撃しても効かないって

まだ子供だから仕方ないだろうけど・・・

「お先に行かせてもらいますえ」

「なっ、ズルいよ!!」

月詠みさんが痺れを切らしたらしく先を越されてしまった。

後を追うように俺も突撃した。

先に月詠さんが刹那と刃を衝突させた。

むう取られた、ならネギの方からやろうかな

よし、俺の脚力の一片を見せてあげよう。

ネギは前方に魔法障壁を展開させて俺の攻撃を防ごうとしていた。

月食で魔法障壁を攻撃すれば確かに魔力を削れるけど

ここは一気に持っていきたいよね
音姫で斬りかかると見せかけて素早い切り返しで
一瞬のうちにネギの背後を取った。

「兄貴ッ後ろだ!!」

ネギの肩に乗っていたオコジヨが俺に気づき叫んでいたが
ネギが振り向くときには音姫の刃がオコジヨのいない方の肩に当た
っていた。

「もらった・・・水月流・月食!!」

ネギの肩を音姫の刃が滑るかのように斬りつけた。
鮮血が飛び散って地面をポタポタと赤く染めていった。

「アッ兄貴!!大丈夫か!？」

「まだ・・・何とか・・・」

ふむ、最高のタイミングだったはずだけど
容量が多いためか魔力が少し残っている・・・もう一撃削ってやるか

「ネギから離れなさい、このチビ仮面!!」

いや、俺実際12歳だからこのくらいが普通だと思うけど・・・
アスナがどこからか出したのか知らないけどハリセンを振りかざし

て来ていた。

身体を捻って回し踵蹴りで振り下ろされたハリセンを握る手を攻撃して武器を落とさせる。

そして無防備になった所を捻った勢いのまま

水月流奥義・汜濫を鳩尾にヒットさせる。

「グッ……かはっ!!」

「……ありゃ？」

汜濫を当てただけで倒れちゃった……

見たところ体内の魔力が乱れ荒れすぎているからっぽい

魔力制御の基礎ができていないようだ

つまりまだ魔法について知って間もない……

この前まで一般人だった人が喰らえばこうなるのも当然か

「ア……アスナさ（ドスッ）ごふっ!!……」

とりあえずネギも鳩尾を殴ってダウンさせる。

「月詠さん、こっちは終わりましたよー!!」

「もうですか、カイトはん強いおすなあ」

月詠さんは刹那と間合いを取っている状態だった。

戦況は月詠の方が優勢、ここに来るまでに刹那は力を消耗していたようだ。

「ほな、ウチも決めまひよか」

「千草さんは先に行っちゃててください」

「おおおお・・・わ、わかつたえ」

「くつ・・・このかお嬢様・・・」

月詠さんが攻撃に移ろうとしたとき
空から無数の気の攻撃が俺と月詠さんの周りに降ってきた。
一つ一つの気を叩き落したり防御したりしながら
降ってくるそれを避け続ける。

「これは神鳴流の技ですな〜」

「神鳴流・・・いったい誰が？」

・
雨のような攻撃が終わると土煙が舞っていて視界がよく見えない・・・

土煙が消えるとネギたちや捕まえたお嬢様がいなくなっていて
うう・・・と唸りながら倒れている千草さんがいた。

「千草はん？何があっ たんですか〜〜」

ふらふらの状態の千草さんの意識がはつきりしてきた。

「まさか二代目が来るとは思わんかったわ・・・」

「二代目？」

「誰ですか〜〜」

「知らんのか、弱冠16歳で関西呪術協会の中で上位の実力を持つ天才で

二代目サムライマスターと期待されとる「東雲 仁」ゆー神鳴流剣士や」

東雲・・・・師範と同じ名字だ・・・

もしかしたら師範の血縁者・・・・まさか孫？

「はー何や斬りがいがありそうやわぁ」

「年頃の娘がゆーことやないなあ、月詠はんもカイトはんみたいに・・・・？」

名字が東雲ってことは宗家のものじゃなく・・・・よそ者そして神鳴流・・・間違いなさそうだな

「カイトはん・・・・どないしたんや」

「・・・・・・・・千草さん」

「おっおお、何や」

仮面を外して千草さんの方を見る。

自分の口の両端が自然とつり上がっているのがわかった。

こんなにも戦いたいと思う気持ちも初めての感じだな・・・

「何だか削りがいのある相手じゃないですか」

東雲 仁・・・貴方の父がよその流派に渡ったこと

俺の剣で後悔させてあげます・・・

第十話

芽生えた二つの音調（後書き）

情報屋ラフェール

ラフェールだ

久しぶりに情報屋の仕事がここでできるぜ

今回のカイト君の「音響剣・崩鈴」だが

これは音姫から響く鈴の音のような音が

相手から放出された魔法や技の魔力、気の結合を崩す技だ。
圧縮された力を解き緩めると言った方がいいか

簡単に言えば乾燥したカチカチ砂団子が水びたの泥団子に変わって
いく感じた。

魔力結合が緩み切った魔法は空気抵抗に負け辺りに散らばって行く
今回のネギの魔法のようにな

ついでだが「音響剣」と今回出た「音響剣」の違いだ

音響剣・・・人に傷、ダメージを与えることが可能な攻撃系の技

音響剣・・・人に傷、ダメージが与えられない補助、防御系の技

今回はこれで全部だ。

何だか気分がとてもいい・・・

フルーツパフェでも食いに行くか

それじゃ、また次話で

第十一話 続け、京都観光（前書き）

原作視点が書きづらい・・・
て言うか、ネギたちぶったたら先の展開が思いつかない
原作がちらつくよ～～～（泣）

第十一話 続け、京都観光

カイト said

昨夜、お嬢様このかの確保に失敗した。

千草さんは新たに作戦を立てるらしく山の中にある古びた神社の前に集められた。

「作戦立てずに襲えばえーじゃないですか〜」

「アホか、二代目が敵におるんやで、簡単にいくわけないやろ!!」

二代目ね・・・東雲 仁、関西呪術協会でトップクラスを
持っているのかなりの強者なんだろうな

「俺も月詠さんの意見と同じです。魔法の秘匿とか知りません」

「だから秘匿とかやなくてやなあ・・・」

眉間に人差し指を当てて千草さんが険しい顔をしている。

二代目二代目って言ってますけど実力で負ける気なんかありません
よ。

「なあ千草姉ちゃん、この仮面付けた奴誰や?」

千草さんの隣にいる犬耳の少年が俺を指差して疑問を口にしました。

正直まだ自己紹介してませんでしたから当然の反応かな

「この子はなカイトはんゆーてウチの作戦に手を貸してくれとる人や、結構強いんやで」

「ふーん、俺は犬上 小太郎や・・・ところで何で仮面なんか付けたるんや？」

「気に入ってるからね」

と言うよりこの仮面は今じゃ俺の中で大切な物だからね
これはイズルさんがくれたものだし
何より義賊としての証のようなものだから・・・

「もったいないわぁ、カイトはんかわええ顔しとるのに」

「月詠さん、それについては触れないでください・・・」

べ、別に自分の顔を隠したいとか

そうゆうのじゃないですからね・・・

落ち込み気味になっていると突然仮面がひょいと外されました。
そして仮面は月詠さんの手に・・・

「ちよっ何を・・・返してください!!」

「これから人に会うゆーんにお面は失礼ですえ」

月詠さんの言う通り、この集まりは新しく千草さんの作戦に協力する
新入りさんの顔合わせも兼ねている。

待ち合わせの時間がもうすぐらしく

千草さんは懐中時計をチラチラ確認しているんだけど

いったいどんな人なんだろう・・・

気になる・・・けど今はそれよりも

「わかりましたから返してください」

俺から逃げる月詠さんが面白がつて中々返してくれませんか。
スピードも上がつて俺と月詠さんの走る軌道の中にいる
千草さんと小太郎に竜巻状の強い風が襲っている。

・・・つて、あれ？

月詠さん、足速くないか・・・

「すみません、遅れましたか」

最悪のタイミングで新入りさんがやって来たようだ・・・

ちょうど後ろを向いていて見えないが

初対面の相手に恥ずかしい所を見られてしまった・・・

いま本当に仮面返してほしいです・・・

いつまでも背中を向けているのも失礼なので

決心して振り向いた・・・えっ？

「僕はフェイト・アーウェルンクス・・・よろしくね」

フェイト・アーウェルンクスと名乗った新入りの少年の姿がある少女の姿と重なって見えた・・・

髪の色、目、服装、雰囲気・・・何もかもが似ていた。

白く綺麗なセクストウムの姿と・・・

うーん、見れば見るほど他人とは思えない
逆にここまで似て兄弟じゃない確率の低いほうがおかしい

「そーゆー事になったから好きにひとつてええで」

「はっ？」

気がつけば千草さんとフェイトは跳躍してどこかへ飛んで行っていた。

あれ・・・作戦の話どうなったの？

「月詠さん、作戦会議どうなったんですか？」

「カイトはん、きーてへんかったんですかあ、フェイトはんの発言で作戦は二人が考えるんで
ウチらは今日お休みやって」

「あいつ新入りのくせに生意氣とちゃうか」

作戦を立てるのは俺を合わせたここにいる三人は無理そうだからね・

しかしフェイトに聞いておきたかったな

明日もあることだしその時にでも聞けばいいか

「なら俺は京都観光の続きでもしようかな」

「観光なら連れてつてくれへんか、俺なんもやることないねん」

「ほなウチもカイトはんに付いていきまひよか」

小太郎と月詠さんはよっぱど暇なのか観光に付いてくるそうです。

まあ誰かと観光する方が楽しそうですからね

山を下りて街の方に歩いていきます。

そう言えば月詠さん・・・仮面返してください・・・

ネギ said

「俺は東雲 仁、刹那とこのかの幼なじみみてーなもんだ、まあよろしく」

「えっと、3-A担任のネギ・スプリングフィールドです。昨夜は

ありがとうございます」

「気にすんな、人は助け合わないとな」

今ホテルのロビーで昨日このかさんを助けに行った僕たち三人と危なかった所を助けてくれた黒い短髪の男の人
東雲 仁さんがいます。

「本当に助かりました。東雲さんがいなければこのかお嬢様は・・・

」

「だから気にすんなって刹那」

仁さんが刹那さんの背中をバンッと叩いて励ましの言葉をかけていました。

でも僕・・・助けに行っただけど何もできなかった

仮面を付けた人に手も足も出なくて・・・

アスナさんも刹那さんも黙って暗い空気が漂っている

「落ち込むなよ・・・このか様が無事なんだからオーケーだろ」

「・・・そうですね」

仁さんの優しい言葉に心が救われるけど

同時に自分の未熟さが情けなく感じてくる・・・

僕がみんなを守るくらい強くならなきゃ

「そうですよ、気を取り直して修学旅行二日目を楽しみましょう」

「みんなここにおったんか捜したえ〜って・・・」

ロビーの会談からこのかさんが降りてきていました。

このかさんが何かに驚いたような顔をした後
階段を駆け降りてきました。

「ジンくんや〜〜、久しぶりやなあ」

「このか様よしてください」

「このか様言わんで〜〜」

仁さんはこのかさんに抱きつかれて困って・・・照れてるのかな？
そしていつの間にか刹那さんがいなくなっていた。

たぶんどこかでのかさんを見守っていると思っただけど・・・

「ネギくん、今日ウチの班と見学しよー」

「えっ、あ・・・」

「いえネギ先生、是非三班に・・・」

「むっ、このかが抱きついてるそのイケメン誰ッ・・・まさかこ
のかの彼氏!？」

「こらパルツ！あんたが話すとややこしくなるから黙って！！」

あうう~~~~・・・

何だか騒がしい一日になりそうだよ~~~~

小太郎 said

カイト兄ちゃんが京都観光するゆーて付いて来たけど
やることはただの食べ歩きやった。

今は奈良の自然公園の近くにある団子屋の外の赤い布が敷かれとる
長机に座って団子を幸せそうにパクついとる
俺と月詠姉ちゃんも同じように団子をパクついとるけどな・・・

「おばちゃん団子三つ追加、きな粉で」

「まだ食うんかいっ、これで七回目やで！」

「そーゆー小太郎はんも五回目ですえ」

うぐっ・・・う、うまいもんは食べな損やしな

それにカイト兄ちゃんがお勘定はろうてくれるらしいやんけ
ここで食わんとどこで食うねん

「はあい、きな粉三つだあ」

「おお来た来た、美味しそー」

「うちもみたらし団子二つ〜」

「はあい、ちょっと待ってね」

しかし何や、千草姉ちゃんに聞いたところ
カイト兄ちゃんは超強いらしいんやけど・・・

「はむっ・・・美味し〜い」

まったくそうは見えへん、顔も緩んで迫力無いし
体格も大きいわけやない、腕もひ弱そうに細いし

まるで女みたいや

歳やて俺と二つしか違わんらしいやんけ
信じられへんわ・・・

「ん？どうした小太郎、顔に何かついてるか？」

「いや、何もないで」

「カイトはん口のまわりにきな粉付いてますえ」

月詠姉ちゃんの言う通りカイト兄ちゃんの口のまわりにきな粉が付
いとつた。

親指で口のまわりを拭いて、きな粉が付いたその指を舐めよつた。
ほんま幸せそうやな・・・

「みたらし団子二つ誰かえ？」

「あつそれウチですう」

俺も何か頼もーかな、この黒胡麻団子っちゅーのなんかつまそうやな・・・

「月詠さんの団子も美味しそうですね」

「カイトはん一口食べますかあ？」

「おお、いいんですか」

月詠姉ちゃんが串に刺さった団子をカイト兄ちゃんの口まで運んで食べさせとる。

つまり「はい、あゝん」の状態や、何や仲がええなーこの二人・・・

「これも美味しい・・・さすがは京都ですね」

カイト兄ちゃん・・・ここ奈良やねんけど

「小太郎はんも一口どうですかあ？」

「・・・もらっわ」

差し出された団子にパクツと食らいつく

うまいな・・・

思えば誰かとこんな風に食事取るなんて初めてやな・・・
温かくてえーわ、家族ってこんな感じなんかなあ・・・

三人とも団子をパクついたあと、熱いお茶を飲んで一息ついた。
こんなに甘いもんだくさん食ったんは初めてやったな

「むっ・・・あれは」

突然カイト兄ちゃんが林の方を見ながら立ち上がった。

どうしたんや・・・

「林の奥に「ぜんざい」と書かれた旗が・・・「ぜんざい」とは何者？」

「カイトはん、ぜんざいは人やなくて食べ物ですえ」

「食べ物・・・」

俺の第六感がやな展開を告げよった。
腹・・・大丈夫なんか？

このか said

「せつちゃんどこや〜」

お団子一緒に食べよおもて買って来たけど
せつちゃんが逃げててもーて見失ってしもた。

奈良の自然公園に来た人は間違いないと思うけど・・・

「それにしてもさっきの三人組仲良かったなあ・・・」

遠目で見ただけやけど、お話したりお団子食べさせたり
楽しそーだったなあ

ウチもせつちゃんとやりたかったわぁ・・・

「ここにいらしたんですね」

「ジンくん・・・」

「どうしたんです、暗い顔などされて」

「実はなあ・・・」

ジンくんはせつちゃんと仲良く話せんよーになったことを相談して
みた。

ジンくんは右手を顎に当てて考える仕草をしとる。

聞き終わったあと「そうか・・・」と言葉を漏らして
向こうの空を眺めた。

「気になさらないください、刹那もこのか様と話したいはずですよ」

「そうなん？・・・」

「ただ遠慮していると言うか、恥ずかしいだけなんです」

恥ずかしい・・・か、それやったら

またせつちゃんと仲よく話せるやろか

せつちゃんと昔遊んどった頃が懐かしーなあ

あの時はこのちゃんって呼んでくれとって毎日のように遊んでたなあ
羽根つきしたり、蹴鞠やったりして楽しかったわあ

「そうやな・・・ウチ諦めへんえ！」

「そのいきです、このか様」

「うん」

ジンくんも手伝ってくれるみたいやし
ウチ絶対せつちゃんと仲よくなってみせる。

「でもジンくん、このか様も敬語もやめてなあ」

「はいはいわかったよ、このちゃん」

「よろしい」

ほなまずはせつちゃん捜さなあかな
この辺りは大体捜したんやけどおらん・・・

「・・・？、いま向こうで悲鳴が聞こえなかったか」

「へっ？ウチは聞こえなかったけど」

ジンくんが悲鳴を聞いた方向に歩いて行くと
アスナたちがおってネギくんが目を回して倒れとった。

「おい、何があつたんだ？」

「あつジン、いやっこれはちよつとあの・・・」

「知恵熱という奴ですね」

知恵熱・・・何があつたんやろか？

カイト said

「いやゝ食べましたね、幸せで天国に行っちゃいそうですよ」

「俺はほんまに行くんちゃうかと思つたけどな」

「観光がついででしたなあ」

辺りはすっかり日が落ちて夜になろうとしていた。
俺たちは京都観光を終えてそこら辺をぶらぶら歩いていた所だ。
行く先々で美味しいものが売られていて

食べるのに苦労しましたよ。

さすが師範の故郷・・・

「それじゃあ、俺はこれで・・・」

「おう、また明日な」

「カイトはん、さいなら～～」

俺は今夜寝るところを探しておかないといけないからね
昨日と同じ場所で野宿するって何か危ない気がするよね
ほら、義賊稼業で毎日危険と隣合わせだったわけだし

真っ暗になる前に確保しないと・・・

そんなわけで山の奥に進んでみる。

やっぱり一番落ち着くのは木の上だからね。

木から木へ飛び移りながら適した場所を探す

20分ぐらい探すと近くに川があり、人に気配がまるでない所を見つけた。

「ここの木がいいな・・・」

手頃な木に上り、枝に足をかけて身体を寝かした。

辺りは静かで水の流れる音だけが聞こえてくる・・・

魔法世界でのいつもの夜と同じで落ち着ける。

明日は千草さんとフェイトが作戦を立ててお嬢様を確保することに

なっている。

あと関東魔法協会からの親書の妨害も含んでいるみたいだけど
いずれにせよ東雲 仁と一戦交えることは間違いないだろう。

音姫を取り出して刀身の先から柄までを眺める。

東雲 仁との戦いは師範のためでもある

余計なお世話なのはわかっているけれど

神鳴流よりも水月流の方が強いってことを証明してやらないと・・・

大丈夫・・・今までたくさんの苦難を乗り越えて来たんだ。

共に生きてきた音姫は俺の大切な相棒だ

信じているし、裏切るつもりはない・・・

俺と一緒に音姫は父さん母さん、村の人の魂を背負っているんだ

だからこそ、偽りの正義に屈するわけにはいかないんだ

手に力が入ったとき、俺の隣に気配を感じた。

右を向くと隣の枝に人が立っていた。

白い髪に白い肌、無機的な瞳に無表情な顔・・・

セクストウムかと一瞬思ったが

その人物は新入りのフェイトだった。

第十一話 続け、京都観光（後書き）

情報屋ラフェール

ラフェールだ

カイト君は食べることが一番の幸せみたいだなあー、まあ自分も似たようなものだが・・・

あと、作者がめんどくさがって

次話から

原作は進むが原作 said は必要最低限しか書かないと決めたようだ。

作者曰く、「原作？仮契約？勝手に進んでるバーロー」とのことだ。

そうだ、さっきアズも帰って来たことだし

杏のタルトをみんなと食べるか

第十二話

地の少年 フェイト（前書き）

戦闘シーンさらっと飛ばしたところがありますがどうぞ
フェイトってこんな感じですかね？
後半が書きずらかった・・・

第十二話 地の少年 フェイト

カイト said

「何か用ですか、フェイト？」

「カイト・メトロノーム・・・君の実力が知りたい」

俺のフルネームを知っているなんて、いったい何者？

義賊始めてから名乗ったことなんて一度もなかったのに・・・

魔法世界の戸籍上、俺は死んでいることになっているはずだけど
まさか、メガロの方に正体がバレた・・・

いや、旧世界までメガロの目が届くわけが無い

それに実力が知りたいって・・・何をする気なんだ

フェイトが指をかき鳴らすと周囲の空間が塗り替えられていった。

「これは、結界空間・・・かなりの広さだ」

見渡す限り砂漠一色になりあがったこの空間は少なくとも
半径15kmはあるだろう・・・

これほどの結界空間なんて聞いたことがない
完全に閉じ込められちゃったね

「結局・・・何がお望み何ですかね？」

「人間の實力を測るには実戦が一番速く的確なんだ」

「遠回しに戦いたいって聞こえるんだけど」

「僕はそう言っただけだよ」

フェイトの身体から魔力が溢れ出し周囲の砂を吹き飛ばす。

俺を威圧するかのように殺気も飛ばしてきているが相変わらず無表情のままだ。

だけど、マジってことだね・・・

俺が結界空間を脱出するには術者が自分で解くか、術者を倒すしかない

前者はまずありえないから必然的に戦うことは避けられない

仕方ないか・・・

音姫を構えてフェイトを見る。

「そう、それでいい カイト・メトロノーム」

「まあ身体動かすの嫌いじゃないし、今日一日の食事の消費に丁度いいからね」

初めて手合わせする敵はお互いの手の内を知らないから

警戒して様子を見ながら戦うのが安定する。

つまりお互いの手の内を探り合いになる。

俺の手札は水月流、脚力、演奏呪文、音剣、二重奏の五つ・・・

これをどのタイミングでどう使うかで勝負の流れは大きく変わる

高位の魔法使いと比べても俺の手札は多いから

戦術的には俺の方が有利である可能性は高いけど・・・

ここはフェイトが作り出した結界空間
地の利は向こうにあるのは間違いない・・・でも

「先手は俺がもらう！」

フェイトとの距離を詰めて実力の60%ぐらいでフェイトの出方を見る。

フェイトは俺の斬撃をかわしながらカウンターを合わせてくる
恐らく力を俺と合わせているのだろう

なら少しずつ攻めてみるか、それに・・・

「乾燥した空間って嫌いなんだ 水月流奥義・津波」

フェイトを中心として全方位から津波が襲う
それをジャンプして上にかわすが予想済みだ。
フェイトのかわした先のは既に俺が待ち構えてあった。
水月流・月食で真上から斬りかかる

ガキイイイイイイイン！！！！

「やっぱり止められたか・・・」

「どうしたんだい？ 障壁を一枚も突破していないよ」

「当然だよ、水月流の斬撃は障壁を突破できない・・・」

音姫の刃を障壁に滑らせるかのようにして障壁ごとフェイトを押し飛ばす。

そのまま地面に衝突したが大したダメージはなさそうだ

「・・・障壁の魔力が削られた」

そう言いつつもフェイトはまったく表情を変えずに冷静に分析していた。

障壁や武器、鎧からの魔力削りは気づかれにくいんだけど初太刀で気づくとは・・・

今ので戦いの流れはこっちに傾いたけど

攻め急いで手の内を明かすわけにはいかない

実力を抑えたまま再びフェイトとの距離を詰めて追撃する今の流れを変えられる隙を与えるわけにもいかないからね

「興奮めだね・・・」

ドンッ・・・なっ!?

フェイトがそう呟いたとき腹と顎に重い一撃を喰らった。

さっきとは逆で今度は俺が突き飛ばされた。

砂の上を転がりながらも体勢を整えるが、すぐ目の前にフェイトが迫っていて

右手に石の大剣を作り出して振り下ろそうとしているところだった。

後方に飛びあと数センチの所でかわしたが

石の大剣が地面に衝突した衝撃で流砂が俺を呑み込んだ。

身体の半分が砂に埋まってしまい抜け出そうとするが・・・

「砂が鉄みたいになっちゃっている!？」

身体が砂で固定されて身動きが取れない状況になっていた。
そんな俺の前にフェイトが降り立った。

「力を抑えて僕の手の内を探っているみたいだけど

そんな事をしながら僕に勝てると思っていたのかい？」

くっ・・・今のがフェイトの本気の力？

いやこの感じ、フェイトはまだまだ力を隠している

もし本気ならきつと石の大剣の一振りで終わっていただろうね・・・

「イズル君が認めているみたいだから期待してたんだけど・・・期待外れだよ」

なっ、どうしてフェイトがイズルさんのことを知っているんだ!？
タンッ・・・とフェイトは高く飛び上がり空中に浮き止まった。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

おお、地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ。『冥府

の石柱』」

呪文始動キー・・・西洋魔術師だって!?

フェイトの頭上に巨大な柱状の一枚岩が現れてそれを俺に向かって落としてきた。

確かこの石柱は一個の物体であるから

対魔法障壁では防御不可、あの高さから落ちてくるんだ

対物魔法障壁、水流障壁の防御範囲、10tトラックの衝突を軽く越えている

防ぐことができないなら、破壊すればいい!!

「音撃剣・破音」

俺の身体を固定している砂を吹き飛ばして体勢を立て直し
刺突の構えを取り

すぐそこに迫った石柱に向かって飛んだ。

「音撃剣・破碎一突!!」

石柱に音姫を突き立てると石柱は砂のように細かく碎け散り砂漠に混じった。

「ようやく本気になったみたいだね」

「・・・君が何でイズルさんのこちらを知っているのか知らないけど

「イジルさんの顔に泥を塗ったまま終わるわけにはいかないからね」

音姫を奏で演奏呪文を始める。

俺がいま演奏している呪文は攻撃魔法ではない

これは召喚演奏呪文・・・実用できるレベルにはなった
まだ力を完全に引き出せないから通用するのか心配だけど
出し惜しみしている場合じゃない・・・

「さて・・・何をしてくるのかな？」

フェイトは俺が仕掛けるのを待っていた。

あくまでも俺の実力を測るのが目的のようだね

召喚演奏呪文を終えて召喚呪文の発動を開始する

（さあ我が演奏に応え、精霊界から姿を現し、その美しき声で全てを魅了せよ）

「召喚・精霊の女神」

俺の後ろに神々しい光を放ちながら

純白の衣を纏い瞳を閉じた長い金髪の美しき女神が現れる。

これは召喚と言うよりも降臨と言った方がいいのかもしれないな
俺はフェイトに向かって笑みを見せる。

「待ってくれてありがとう、これで戦況は俺が有利になりました。」

「へえ・・・それは楽しみだね」

その無表情な顔を驚嘆のさせてあげますよ

西洋魔術師がこの女神の前で満足に戦えるとは思わないでください・
・

30分後、勝負は早くも決着していた。

砂漠の結界空間には大きなオアシスが出来上がっており

そのオアシスの真ん中で俺が浮いていた。

戦いは俺の敗北で幕を下ろしたのだ。

「まさか女神に捧げる最初のものが敗北の二文字とはね・・・」

「君の歳でその実力があれば大したものだよ」

その言い分からすると俺の実力はいいものだったってことかな
しかし戦況は俺が有利な状況だったのに、こつもあつさり負けるな
んて・・・

実力の差が違いすぎた、俺が戦った相手の中で一番強かった

「そう言えばフェイトはイズルさんを知っているの？」

「うん、よく知っているよ」

「だったら教えてくれないかな、イズルさん自分のこと全然話さないから俺よく知らないんで」

「・・・僕からは何も言えないね、彼が自分から話すのを待ったらどうだい？」

それっていつのことになるか・・・

フェイトが指をかき鳴らすと結界空間は無くなり

川の流れる音がする夜の森に戻った。

上半身を起こして、座った状態で話を続ける。

「なら今度の質問、セクストウムを知ってる？」

ほんの一瞬、フェイトの顔が驚いた表情を見せた気がした。

フェイトは片手をポケットに入れて月を眺めたあと、また俺の方を向いた。

「そうか、時折どこかに転移していると思ったら君の所だったのか」
知っていた・・・やっぱり何らかの関係があったのか

「・・・で、セクストウムとの関係は？」

しまった、明らか軽率で直線的な聞き方をしてしまった。
俺したことが少しテンパっているようだ。

や、やばい、ここで彼氏ですとか言われたらどうすればいいの！？

と言うより言われたら俺色んな意味でぶっ倒れるよ

「僕と彼女は・・・」

フェイトの次の言葉を内心ドキドキしながら静かに待っていた。
自分がこの状況を作ってしまったのだが心地のよいものではない。
フェイトの声以外が耳に入ってこなくなるかのように
川の流れる音が聞こえなくなる。

そしてやっとフェイトの口が動いた。

「悪の親玉の狂った夢を叶える為の・・・『道具』だよ」

何か微妙に質問の答えがずれている気がするけど・・・
もしかしてセクストウムが言ってた仲間の一人かな
だけど気になる単語が出てきたんですが

「『道具』とはどうゆう意味で？」

「僕と彼女は人間種でも亜人種でもない、造られた存在・・・つまり人形なんだ」

セクストウムが造られた人形・・・

つまり人形使いの人形、チャチャゼロみたいなのか・・・
フェイトも、だから二人が瓜二つに似ているのか

「セクストウムに対する意識が変わったかい？」

「・・・いや、何も変わらないよ、例え人形だったとしてもこの想いは変わらない」

「この想い？」

「あ、いやっ何でもないから忘れて／＼／」

手をワタワタさせながらフェイトを誤魔化す

俺何言っちゃってるんだろ

何か別の方向に持っていていかないと・・・

「お、俺は話し合ったり笑ったりできれば人間性はあると思うんだ」

「・・・アーウェルンクスに感情は無いはずだけど」

アーウェルンクス・・・人形体の名前か？

えっ、でもセクストウムはあの時確かに微笑んでいた。

それを聞いたフェイトは何か考え込んでいるようだった。

「やはり起動が・・・」と、わずかに呟いた声が聞こえた。
聴こえたところで何かがわかるわけじゃないけどね・・・

「で、セクストウムは元気にしてる？」

「セクストウムならいま魔法世界で安静にしているはずだよ」

「病気が何かですか？」

「いや、彼女は起動してすぐだから核の調子が悪いんだ」

核ってホントに人形なんだなあ

ところでセクストウムを造った人ってどんな人なんだろう？

その人がセクストウムのマスターになるわけだから

親ってことになるのかな・・・

てことはいずれ挨拶にいきなさいけないかも

・・・って、俺は何を考えてるんだ！？

「そう言えばイズル君は一緒じゃないんだね」

「ふえっ・・・ああ、イズルさんは仕事でして、たぶんこっちに来てるんじゃないかな」

この仮面には魔法の発信機のような機能が施されているから俺の居場所はわかってるから京都に向かって来てると思う。あれから何日過ぎたんだろうか？

チャチャゼロとダイオラマ魔法球で過ごした時間がごちゃごちゃになっ

わかんなくなってるな・・・

そろそろこっちに着いてもおかしくないはず

「そうだカイト君、明日の作戦についての話だけど」

「千草さんとフェイトが作戦立てたんだけ、結局どうなったの？」

「まずは作戦決行時刻だけど・・・」

ふむふむ・・・はい？

そんな作戦千草さんが了承してるんですか？

第十二話

地の少年 フェイト（後書き）

情報屋ラフェール

ラフェール：今回はカイト君とフェイト君の戦いと話し合いで終わったな

作者としては難産だったようだ

アズ

：クフユ~~~~

ラフェール：そうだな、早速情報を提供しよう・・・

しかし、口止めされているからそんなには話せない

『召喚・精霊の女神』

これは作者の中でチートになるんじゃないかと書き始めた頃から思っていたカイト君の技だ

因みにこれはカイト君はダイオラマ魔法球で練習して

いたらしい

次話は時間を少し飛ばして本山侵入前からの予定だ
また見てくれると有り難い

アズ

：クフユクウ~~~~

第十三話

総本山、奇襲（前書き）

危ない、もう少しでこの小説止めるところだった・・・

大体書き慣れてきたし、

新しく何か書こうかな、もちろんネギま！で

タイトルは・・・「清冽な雫」かな

かなり先だと思っから期待しないでね

第十三話

総本山、奇襲

カイト said

俺は西の総本山の守護結界の術式と戦っていた。

この守護結界に細工を施すため、朝から十時間が経過していた。

陰陽道は少しかじった程度なのでかなり手間取っているわけです。

何故こんなことをしているかと言うと

フェイトたちが本山に追い込んだネギ一行を捕らえるためだ

作戦は本山に入って安心している隙を突いて

本山の戦力を削り、お嬢様を誘拐してしまおうというものだ

この作戦に千草さんは中々賛成しなかったらしい

まあ実際、無茶苦茶な作戦だからね

「あとはこの術式を書き換えて……終わった」

時間がかかったけど、その分いいものができた。

時刻は午後七時……ネギ一行はもう本山に入ったころかな

「ちょうど終わったみたいだね」

「まあね、後は本山にある要石で発動させるだけ」

細工を施したときフェイトがやって来た。

後ろには月詠さんと小太郎も一緒にいるが

「やっぱり千草さんは来なかったね」

「別にえーんちゃうか、千草姉ちゃん弱いし」

「先に湖のほうに行くゆーてましたえ」

儀式場所に向かったってことか・・・

これってお嬢様を連れてきて来ると信じてるってことか・・・
と言うより10代の少年少女に任せる大人って・・・

「それじゃあ本山に侵入するけど、準備はいいかい？」

俺と月詠さんと小太郎はそれぞれ顔を見合わせて

コクリと首を盾に振る。

そして俺は仮面を付け代表としてフェイトに親指を立てると
フェイトは無言で守護結界の方に振り向き片手をかざす
守護結界に半径1mほどの円の抜け穴ができた。

俺たちが全員その穴を通ると抜け穴は無くなり

本山に侵入することに成功した。

「僕は先に行くよ」

そう言ったフェイトは水を利用した転移魔法で消えた。

フェイトの最優先は西の長の無力化にお嬢様の誘拐だから忙しいね
それじゃ、俺たち三人は本山の守護結界を発動させている要石に向

かうか・・・

足音を立てず夜桜が舞う屋敷の中を走って行く

「カイト兄ちゃん、その要石ってどこにあるんや？」

「この先の角を曲がった先の建物の中に・・・・・・止まって」

足を止めて建物の角から顔を少し出して様子を見る。

要石のある建物は武装した女の人が六人見張っていた。

さすがに守護結界の発動体である要石は警備されているか・・・

「小太郎、月詠さん・・・行くよ」

「いつでも行けるで」

「了解ですう」

俺は屈んで手頃な石を一つ拾う

攻撃の合図はこの石にしようかな・・・

関西呪術協会 女剣士 said

私は総本山で守護結界の発動体である要石の警備を任されている一人
この要石が破壊されると守護結界は無くなり

本山の近辺にいり低級妖怪の大群に攻め入られてしまうので
かなり重要な役割なんですけど・・・

「守護結界の中にある要石を護って意味あるのかな？」

私ではなく同じ警備をやっている呪符士がそう口にします。

他の警備の者も皆同じ意見のようです。

実はと言うと私も同意見なのですが・・・

「そやねえ、本山の守護結界を抜けてくる妖怪なんておらんやろし」

別の警備の者が木の手すりに手を置いて話し始めました。

皆さんからこの警備に対する愚痴が聞こえてきます。

でも何かの拍子に要石が壊れてはいけませんし・・・

確かに10年以上もこの守護結界を抜けられたことはなく

平穏な時が続いてきました。

そのせいか、警備に対する責任感が薄れている気がします。

このかお嬢様もお帰りになられているというのに

腕の立つ者はほとんど西日本全域に出払っていて危険な状況なんですよ

「私たちも宴に行きたかったなあ～～」

「そうですよね」

「はぁ・・・」

私はため息をつきました。

同じ警備の者として情けないと思います。

いっそのこと侵入者でも現れて凝らしめてくれたらなあ

そうすれば改心して真面目に警備をするはず・・・なんてね

今日は夜桜がとても綺麗に舞っています。

月の光も美しく、こんな時は警備の事を忘れて

景色を楽しみたいものですね・・・

「あれ・・・」

私が眺める月の前を何かが遮りました。

それは地球の引力に引かれて落ちていき

カッーンと音を立てました。

これは石・・・

そう思ったとき正面から一つ、屋根の上から二つの人影が現れた。

不意を突かれて気づくのが遅く

三人は呪符を頭に貼られてその場に倒れた。

あれは催眠呪符・・・

「笛を吹いてっ敵襲を知らせるのよ!!」

私の声に、大きな貝の笛を持つ警備の者が慌てて吹こうとします。

「音響剣・無音無響」

笛を持った者が頬を膨らまし笛を吹きますが音が鳴りません。それどころか私の声も風の音すらも何も聞こえません。まるで辺りから音が消えてしまったのように・・・

私は剣を構えますが、

その時には目の前には目の前に何かが迫っていて視界が塞がれていました。

オデコに軽い衝撃を感じると強い眠気が襲います。身体力が脱力していき立つこともできなくなり後ろに倒れていくのがわかります。

本当に敵襲が来るなんて・・・

私に変な考えを起こしたからバチが当たったんでしょうか

私はそこで意識を手放しました。

詠春 said

屋敷の者に客人を客間に案内させ

私は自分の部屋に戻ってあることを考えていました。

最初、刹那君から聞いたときは耳を疑いましたね

水月流・・・今はもう無くなってしまった流派ですがまさか伝承者がいたとは驚きですね

水月流は東雲家に伝わる流派でした。

しかし、私は知らないことを装いました。

水月流の使い手が関西呪術協会に危害を加えているのです
この事を知る人が知れば仁君の立場が危うくなるかもしれませんか
らね

「確か玄水さんの代でしたかね・・・」

伝承者の実の息子さんが神鳴流剣士となる道を選びましたからね
息子さんは私の二つ下で一緒に剣を極めた仲です。

伝承者がいなくなり水月流は潰れてしまい

玄水さんはどこかへ行方をくらまして
それからの彼を見た人はいません。

水月流を伝承させることができるのは彼を除いて他にいません。
伝承者に関西呪術協会を潰させようとしているのでしょうか？

わかりませんね・・・

「しかし、仁君には伝えるべきでしょうね」

彼にはいずれ伝えなければとは思っていましたが
こんな最悪な状況でお話する事になるとは・・・

私は棚から東雲家の家系図が書かれた書物を取ります。
水月流伝承者の記録が書かれた書物は確かこの辺りに・・・ありま

した

私は手を伸ばし水月流伝承者の記録を手に取りました。

「隙だらけだよ、近衛詠春」

「ッ!?!?」

突如後ろから声がして振り向くと何者かが人差し指と中指を私に向けていて

その指先には魔力が込められていました。

私は反射的に回避しようと横に飛びます。

「『石化の邪眼!?!』」

放たれた光線が私の足に当たりました。

そこから徐々に私の身体が石化し始めます。

私が術者の姿を見たとき驚く他ありませんでした。

「君はまさか・・・アーウェルックス!?!」

「平和に生きて腕が鈍ったみたいだね」

白い髪の少年・・・

ネギ君たちでは荷が重すぎる

「貴女はもう戦えない、僕はお姫様をもらいに行くよ」

白い髪の少年は水を利用した転移魔法で消えました。

恐らくこのかがある客間でしよう

あそこには一般人の御婦人方も一緒にいたはず・・・

「くっ・・・せめてネギ君たちに伝えなくては」

足が完全に石化する前にネギ君たちを見つけ出さなくては
持つてくださいよ・・・私の足・・・

刹那 said

私はただならぬ気配を感じて夜桜の舞う廊下を走つたいた。
このかお嬢様の身が心配で客間に向かっている所だ。

「刹那さん!!」

「ネギ先生!？」

私の後ろからネギ先生が走って来ていた。

「刹那の姉さん大変だ、屋敷の姉ちゃんたちが石にされてやがる!

「！」

先生の肩に乗っているカモさんがわかりやすく状況を説明してくれます。

やはりこの気配は敵か！？

本山の守護結界を抜けてくるとは只者ではない・・・

「ネ・・・ネギ君・・・刹那君」

「長・・・！？」

私たちの前に長が現れたが、長の姿は下半身が石と化していた。

「申し訳ない二人とも・・・不意を喰らってこの様です
かつてのサウザンドマスターの盟友が情けない・・・」

「長・・・」

「白い髪の少年には気をつけなさい、格の違う相手だ。
貴方たちだけでは辛いでしょうが、このかを頼み・・・ま・・・す」

そう言い残し長の身体は完全に石化した。

「・・・ネギ先生、学園長先生に連絡をお願いします」

「は、はいっ」

携帯電話を取り出し学園長先生へ連絡を取る

パタッ・・・石になった長の懷から何かが床に落ちた。
これは何でしょうか？

何も書かれていない淡い緑の表紙の書物を拾い開ける。

「これは・・・水月流伝承者の記録！？」

水月流は京にある流派のだったのか！！

しかし、長は何故あの時話してくれなかったんだ？

ページを次々開いていくと東雲 玄水と言う名を最後に記録が途絶えていた。

記録の日付は・・・20年以上も前だ、潰れたのか？

「あれ・・・」

長の石になった懷にもう一つ書物が隠れていた。

ネギ先生はまだ学園長先生と連絡を取っている。

その書物を手に取り表紙を見た。

私は表紙に書かれていた「東雲家家系図」という文字に嫌な予感がした。

まさかと思い書物を見開きにする・・・

「そんな・・・これはどうゆうことだ！？」

そこには先ほどの水月流最後の伝承者の名前があつて
その先の孫にあたるのが・・・

「おーっ！っ刹那！！」

「ネギーっ刹那さーっん！！」

私たちが向かっていた客間のある方から仁さんとアスナさんが走って来ていた。

しかも、かなり慌てているように見える。

「客間に行ったらこのかがいなくなつてて、他の皆が石になつちやてたのよー！！」

「こ、このかさんが！！！！」

「くっ・・・奴らにさらわれたということか」

「何で！？ここまで来れば安全じゃなかつたの！？」

「しかし姐さん、実際に起こつてるんだ」

本山に入って安心しきっていた、私がこのかお嬢様から離れたばかりに・・・

拳を握りしめて腕が小刻みに震える。

「ここで話をしても意味が無い、追うぞ！！」

仁さんの言う通りだ、一刻も早くお嬢様を助けに行かなくては私たちは急いでお嬢様を追いかけて屋敷の中を走り出した。ところどころに石になった屋敷の警備している者がいる。

もう屋敷には私たち以外動ける者はいないのか・・・

屋敷の中を駆け抜けて入口の門の前まで来て門を潜ろうとした時、

バシイイイイイン！！！！

「きゃあっ！」

「わっ！？」

「うわっ！！！」

「でっ！？」

私たちは屋敷を出る直前で見えない何かに弾かれた。

「これは本山の守護結界・・・何故内側から出れないように？」

本山の守護結界だと！？

何故本山の守護結界が私たちの行く手を・・・っ！？

後ろに人の気配を感じた。

振り向くと見覚えのある連中が既に戦闘の構えを取っていた。

「どうですか、屋敷を守る守護結界に閉じ込められた気分は？」

「刹那せんぱい、仁せんぱい・・・ああ、早く斬りたいわ」

「ネギッ今度はお前を倒したるで！！！」

ただでさえ急いでいるというのに・・・

まずい、まずいぞ・・・時間もないのに・・・

このかお嬢様・・・

第十三話

総本山、奇襲（後書き）

情報屋ラフェール

ラフェ：それじゃあ今回の情報提供、早速いこう

『音響剣・無音無響』
むおんむきよう

効果は周囲（8m）の音や響きをかき消すことだ

魔法使いや詠唱が必要な攻撃は使えなくなる

魔法使いは無詠唱魔法しか効果範囲内では使えぬな

アズ：クツクフュ〜フュ〜

ラフェ：おお、そうだった読者に聞きたいことがあったんだった

エヴァンジェリンの呪いの事だが・・・

解いた方がいいのか、無視の方が聞きたいんだ

解いたとしてもカイト側にはあまり関係しないが

少なくとも麻帆良が変わるだろう。

意見があるなら教えていただきたい。

また譜面の刃を見てくれ

アズ：ククフュ〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210w/>

譜面の刃

2011年11月12日18時36分発行